

み、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、器種等は明確にできない。
時期 出土土器から弥生時代、なかでも中期後半以降と考えられる。

SK147

検出状況 当調査区中央東部で検出した（第149図）。SH11の北、SK149の南にあたる。SK148を切り、SK146に切られている。このため、当遺構の一部を欠く。

形状・規模 平面形は楕円形をなし、長軸方向で95cm、短軸方向で67cmを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなり、土器の細片および炭片が含まれていた。特に下層ほど炭が多く認められた。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、器種等は明確にできない。
時期 出土土器から弥生時代、なかでも中期後半以降と考えられる。

SK148

検出状況 当調査区中央東部で検出した（第149図）。SH11の北、SK145の西、SK149の南にあたる。SK147に切られ、一部を欠く。

形状・規模 平面形は楕円形をなし、長軸方向で77cm、短軸方向で53cmを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは52cmを測る。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなり、土器の細片および炭片が含まれていた。埋土中に褐色シルト質極細砂をブロック状に含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、器種等は明確にできない。
時期 出土土器から時期を特定することは困難である。SK147との切り合い関係および埋土の特徴から、弥生時代中期後半以前と考えられる。

SK149

検出状況 SK146・SK147・SK148の北側に位置する（第149図）。切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で92cm、その直交方向で45cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは26cmを測る。底部の規模は54cm×20cmを測る。

出土遺物 特に遺物は出土していない。

時期 時期を明確にすることはできない。

SK150

検出状況 SK151が東側に接して位置する（第149図）。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.10m、その直交方向で67cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。

第6節 V区の調査

出土遺物 特に遺物は出土していない。
時 期 時期を判断できる遺物が出土していないため、明らかにできない。

SK151

検出状況 調査区中央東部で検出した(第149図)。SK150の西、SK152の東にあたる。溝状の落ち込みと切り合い関係にあり、これを切る。
形状・規模 平面形は隅丸長方形をなし、長軸方向で94cm、短軸方向で75cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。
埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなり、土器の細片および炭片が含まれていた。埋土中には褐灰色シルト質極細砂をブロック状に含み、人為的に埋められたものと考えられる。
出土遺物 土器の細片が出土しているが、器種等は明確にできない。
時 期 出土土器から、弥生時代中期以降と考えられる。

SK152

検出状況 調査区中央東部で検出した(第149図)。SK151の西、SD114の北にあたる。溝状の落ち込みと切り合い関係にあり、これを切る。
形状・規模 平面形は楕円形をなし、長軸方向で83cm、短軸方向で76cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは43cmを測る。
埋没状況 3層からなり、下から黒褐色極細砂混じりシルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積していた。各層とも土器の細片および炭片を含む。また、特に中層においては黄褐色シルト質極細砂をブロック状に含み、人為的に埋められたものと考えられる。
出土遺物 全く出土していない。
時 期 埋土の特徴から、弥生時代前期と考えられる。

SK153 (図版155 写真図版95・152)

検出状況 SH12の北端に位置する(第149図)。SH12・柱穴に切られている。
形状・規模 平面形はほぼ円形で、長軸方向で98cm、その直角方向で93cmを測る。横断面は箱形を呈し、最深部における検出面からの深さは32cmを測る。底部での規模は長軸方向で92cm、その直角方向で80cmを測る。
埋没状況 灰色を中心としたシルト質極細砂からなっているが、中央部に黒褐色シルト質極細砂が水平に堆積している。土器はこの層を中心に含まれている。
出土土器 壺と甕が出土している。
壺 口縁部片(1102・1103)と体部片が出土しているが、体部片については小片のため図化できなかった。
1102は、広口壺の口縁部と考えられ、内面はナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施されている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1103は、小片のため、口径を復元することはできなかった。口縁端部に刻み目を施すとともに、口縁部外面に刻み目突帯を貼り付けている。内外面の調整は磨滅のため観察できない。

なお、図化できなかった体部片には、多条のヘラ描沈線紋が描かれている。

甕 口縁部から体部上半にかけて残存する個体（1104～1107）と底部片（1108）が出土している。

1104は、口径38.4cmを測る比較的大型の甕である。口縁部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。体部については磨滅のため内外面とも調整は観察できない。1105も、内外面の調整は磨滅のため観察できない。1106は、内外面ともナデ調整により仕上げられ、口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には6条のヘラ描沈線紋が描かれている。1107は、内面をナデ調整により、外面をハケ調整の後一部ナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施されている。

底部の1108は、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK155

検出状況 SH12の北西隅に位置し（第149図）、SH12を切っている。

形状・規模 平面形は円形で、長軸方向で68cm、その直交方向で56cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは34cmを測る。底部での規模は長軸方向で28cm、その直交方向で20cmを測る。

出土遺物 特に遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため、時期を明らかにすることはできない。

SK156

検出状況 SH12の西端に位置する（第149図）。SH12に切られている。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.10m、その直交方向で65cmを測る。横断面は皿形を呈するが、東側が若干深く、西側との境で緩い段がある。最深部における検出面からの深さは16cmを測る。底部での規模は長軸方向で80cm、その直交方向で40cmを測る。

出土遺物 土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK157（図版159 写真図版190）

検出状況 SK158の東側に位置する（第149図）。完存する。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で90cm、その直交方向で75cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。

第6節 V区の調査

出土遺物 砥石（S88）1点が出土している。
平面形が、長さ19.3cm、上辺10.7cmの台形状を呈する板状の砥石である。厚さは2.3cmを測る。下辺は欠損しており5.7cm残存する。一面に、8mm×15～16cmの溝が4条認められ、その内の1条は他の2条と切り合っている。溝の深さは2～3mmを測る。玉製品等の製造過程における砥石の可能性も考えられる。石材は凝灰質砂岩である。

時期 時期を特定することは困難である。

SK158（図版157 写真図版95・152）

検出状況 SH12の西側に位置する。SD115に切られている。

形状・規模 平面形は長方形を呈し、長軸方向で2.19m、短軸方向で1.36mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは40cmである。

埋没状況 上から、淡黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂の3層からなる。いずれも土器・炭片を含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 壺と甕が出土している。

壺 口縁部片（1116）・頸部片・底部片（1117）が出土しているが、頸部片については小片のため図化できなかった。

1116は広口壺の口頸部で、内外面ともナデ調整により仕上げられている。また、わずかに残存する肩部にはハケ調整がかすかに観察できる。口縁端部に2条の、頸部に10条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1117の底部は、内面をナデ調整により、外面はハケ調整により仕上げられている。

なお、図化できなかった頸部には、6条のヘラ描沈線紋が描かれている。

甕 口縁部片と底部が出土しているが、図化できたのは底部片（1118・1119）に限られる。

1118は、内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。1119も、内面はナデ調整により仕上げられている。外面にはわずかにハケ調整の痕跡が観察できる。

また、図化できなかった口縁部片はいずれも如意形を呈するもので、端部に刻み目を施したものと頸部以下に10条のヘラ描沈線紋を施したものとが出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK159

検出状況 当調査区中央南西部に位置する（第149図）。SK160の北東、SK187の南西にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形はほぼ円形に近く、その規模は70cm×65cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは29cmを測る。

埋没状況 2層からなり、下から黒褐色シルト質極細砂、灰黄褐色シルト質極細砂の順に堆積している。両層とも土器片および炭片を含み、人為的に埋められた層である。

出土遺物 土器の細片が出土している。

時期 出土土器から、弥生時代中期もしくは後期と考えられる。

SK160

- 検出状況** 当調査区中央南西部に位置する（第149図）。SD98の北東、SK159の南西にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形を呈し、長軸で65cm、短軸で38cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは29cmを測る。
- 埋没状況** 2層からなり、下から褐灰色シルト質極細砂、黄灰色シルト質極細砂の順に堆積している。両層から土器の細片が出土している。
- 出土遺物** 土器の細片が出土している。
- 時期** 出土土器から、弥生時代中期もしくは後期と考えられる。

SK161（図版158 写真図版95・153）

- 検出状況** 調査区のやや西側の北端にあり（第149図）、北側にはSK162が位置する。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は不整形で、長軸方向で1.85m、その直交方向で1.30mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。底部での規模は長軸方向で1.30m、その直交方向で80cmを測る。
- 埋没状況** 土器・炭を含む褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 遺物出土状況** 土坑中央部で底部付近から土器がまとまって出土した。土坑の北東側から出土した甕は破片も大きく、まとまって出土していることから、本来は完形であった可能性が高い。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器**
- 壺** 完形に復元できる壺（1120）と口縁部以外、ほぼ完存する壺（1121）および体部片・底部片が出土しているが、体部片・底部片については図化できなかった。
- 1120は、体部外面および内面下半をハケ調整、内面上半をナデ調整、口頸部内面をナデ調整により仕上げられている。口頸部外面については磨滅のため観察できない。口縁端部には刻み目が施されている。胎土中には2～3mmの砂粒が多量に含まれている。
- 1121も、体部内外面をハケ調整により仕上げられている。頸部下端には1条の突帯が貼り付けられている。胎土中には2～3mmの砂粒が多量に含まれている。
- この他、内面に刻み目突帯を貼り付けた口縁部片や指頭圧痕紋突帯を貼り付けた体部片なども出土している。
- 甕** 口縁部（1122）と底部（1123）が出土している。
- 1122は小片のため口径を復元することはできなかった。内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部以下には5条のヘラ描沈線紋が描かれている。
- 1123は、内外面とも磨滅のため十分な観察ができないが、外面にはハケ調整の痕跡が認められる。また内面はナデ調整により仕上げられたようである。
- 石器** サヌカイトの剥片5gが出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

第6節 V区の調査

SK162

- 検出状況** 調査区のやや西側の北端にあり（第149図）、SK161の北側に位置する。東側の一部が調査区外にのびているため、全体の形状は不明である。切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.30m、その直交方向で56cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは28cmを測る。
- 埋没状況** にぶい褐色シルト質極細砂混じり極細砂1層からなる。下層には土器・炭が多く含まれている。
- 出土遺物** 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。
- 壺** 口縁部片・体部片・底部が出土している。口縁部片は広口壺の口縁部である。体部片には5条+αの突帯が貼り付けられている。
- 甕** 如意形を呈する口縁部片が少なくとも2個体分出土している。そのうちの1個体は、口縁端部に刻み目が施されている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK163（図版159）

- 検出状況** 調査区中央北端部に位置する（第149図）。SH15の北側にあたり、一部は調査区外まで広がっている。このため、当遺構の一部を欠く。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形に近い形状をなすものと考えられ、その規模は1.50m×1.40mである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。
- 埋没状況** 2層からなり、下からにぶい黄褐色シルト混じり極細砂、黒褐色極細砂の順に堆積している。上層に土器片が含まれ、一部黄褐色シルトがブロック状に混入していることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 体部片と底部が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。体部片には刻み目突帯が貼り付けられている。
- 甕** 口縁部と底部が出土しているが、図化できたのは底部（1124）のみである。
1124は内外面ともナデ調整により仕上げられている。底部中央に径1.95cmの穿孔が認められる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
このほか如意形をなす口縁部片が出土しており、頸部以下に櫛描直線紋が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK164（図版159 写真図版153）

- 検出状況** 調査区中央北部に位置する（第149図）。SH15・SK165の東側、SK166の北側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は長楕円形をなし、長軸方向で2.60m、短軸方向で1.08mを測る。横断面はU字

- 形をなし、最深部における検出面からの深さは41cmを測る。
- 埋没状況** 4層からなる。下から、暗褐色シルト質極細砂、褐色シルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。各層に炭片が含まれ、特に上から2層目に多く含まれている。最下層を除いては土器が出土している。各層に黄褐色シルトがブロック状に含まれていることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 口縁部・頸部・体部・底部の各片が出土している。このなかで、図化できたのは口縁部(1125)・体部(1126)・底部(1128)である。
- 1125は、長頸の広口壺の口頸部で、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1126は体部の小片である。内面をハケ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。その後、5条を1単位とする櫛描波状紋と11条からなる直線紋が描かれている。直線紋については、櫛描もしくはヘラ描によるものであるが、残存状況がよくないため断定は困難である。また、何単位からなるのかについても明確にできない。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1128は内外面とも磨滅のため調整は観察できない。ただし、外面にハケ調整の痕跡がわずかに観察できる。
- この他図化できなかつたが、多条のヘラ描沈線紋を施した頸部片等が出土している。
- 甕** 口縁部片(1129・1130)と底部(1127)が出土している。
- 1129は、口径31cmを測る比較的大型の甕である。口縁部内外面および体部内面をナデ調整、体部外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施されている。頸部以下に2条のヘラ描沈線紋が描かれ、その下に2条の波状紋が描かれている。櫛描によるのかヘラ描によるのかについては明確にできない。2条のヘラ描沈線紋とは異なる施文具によることは明らかである。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1130も1129と同様の調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施されている。頸部以下には、3条のヘラ描沈線紋が一定の間隔で施され、その沈線紋間に櫛描直線紋が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1127は、内外面とも磨滅のため調整法は観察できない。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。
- SK165 (図版159)
- 検出状況** 調査区中央北部に位置する(第149図)。SK164の西側にあたり、SH15に切られている。このため、当土坑の約1/2を欠く。
- 形状・規模** 平面形は楕円形もしくは長楕円形をなすものと考えられ、長軸方向で1.38m残存し、短軸方向で1.13mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。
- 埋没状況** 2層からなり、下から褐色シルト混じりシルト質極細砂、灰褐色シルト質極細砂の順に堆積している。いずれも土器・炭片を含み、黄褐色砂質シルトがブロック状に混入して

第6節 V区の調査

いることから、人為的に埋められたものと考えられる。

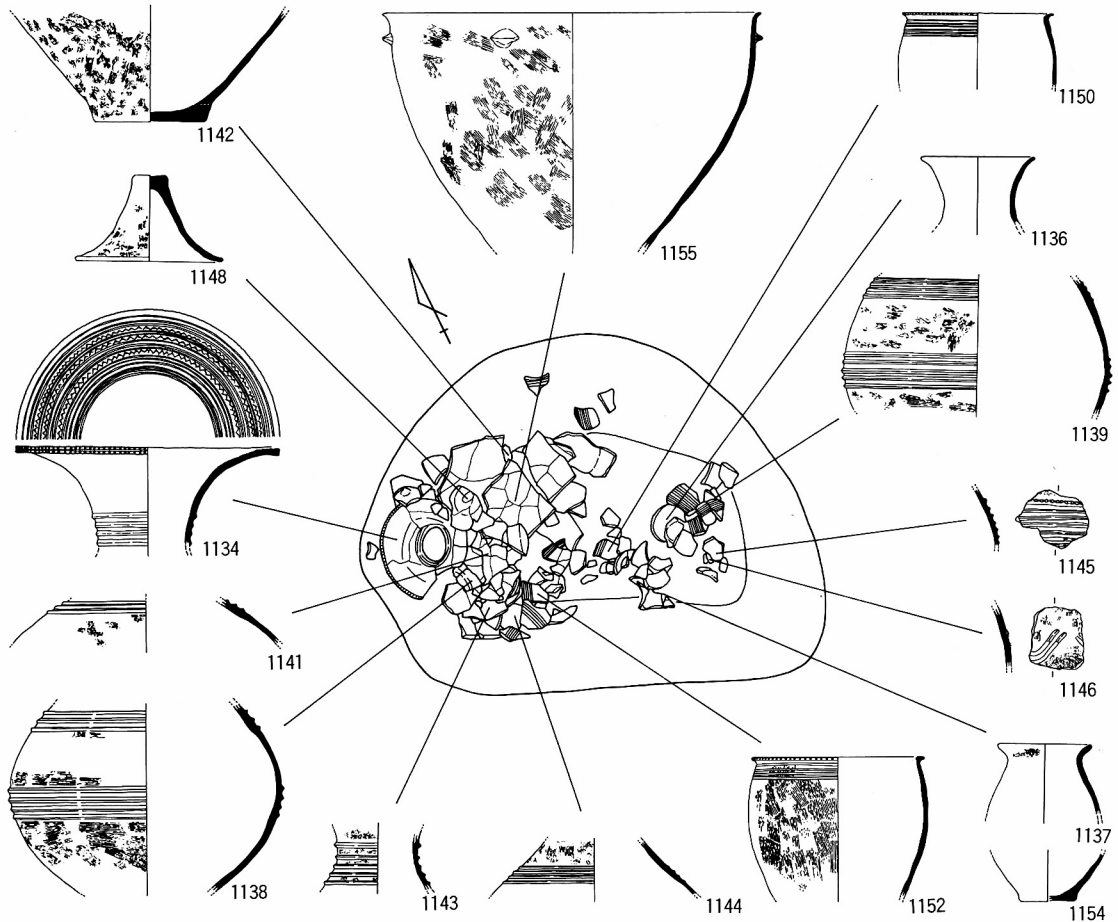
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 体部と底部が出土しているが、図化できたのは底部（1133）のみである。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。体部片には3条+ α の突帯が貼り付けられている。
- 甕** 口縁部と底部が出土しているが、図化できたのは完形に近く復元できる個体（1131）と口縁部（1132）に限られる。
- 1131は、体部と底部の一部を欠く。口縁部内外面をユビオサエにより仕上げられている以外は、磨滅のため観察できない。
- 1132は小片のため口径を復元できない。内面はナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。口縁端部に刻み目が施され、頸部以下に4条のヘラ描沈線紋が描かれている。口縁端部の刻み目は、等間隔に施されてはおらず、その間隔は不規則である。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK166

- 検出状況** SK167の東側に位置する（第149図）。西側の一部がSK167により切られている。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.40m、その直交方向で92cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは8cmを測る。底部での規模は長軸方向で1.10m、その直交方向で82cmを測る。
- 埋没状況** 褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- この他、サヌカイトの剥片17gが出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SK167（図版160～162 写真図版96・153～156）

- 検出状況** SK166の西側、SH14の北側に位置する（第149図）。SK166を切り、SH14に切られている。このため、南半分は削平されている。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.75m、その直交方向で1.31mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは42cmを測る。底部での規模は長軸方向で1.05m、その直交方向で60cmを測る。長軸方向はN65°Wを指向する。
- 埋没状況** 3層からなり、いずれも炭を含んだ灰色～褐色シルト質極細砂である。
- 遺物出土状況** 多くの土器が、比較的良好な遺存状況で出土している（第153図）。全体的に西側から土器が多く出土している。西の端には広口壺の口縁部があり、東側へいくにしたがって体部上半・体部下半が出土しており、本来は同一個体であった可能性も考えられる。この広口壺の南側からは甕が出土し、北側からは甕の蓋、および大型の鉢が出土している。土坑の東側半分は、西側と比較して破片も小さく、あまりまとまって出土していない。ここからは異なる壺の破片が2～3個体分出土している。
- 出土土器** 壺・甕・鉢・蓋の各器種が出土している。



第153図 SK167土器出土位置

壺 口頸部片 (1134～1137)、頸部片 (1143)、体部片 (1138～1141・1144～1147)、底部が出土しているが、底部は小片のため図化出来なかった。

1134は、口径34.4cmと比較的大型の広口壺の口頸部である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目を施し、その後1条のヘラ描沈線紋が描かれている。また、口縁部内面には、内側から6条のヘラ描沈線紋、三角刺突紋、3条のヘラ描沈線紋、三角刺突紋、2条のヘラ描沈線紋、三角刺突紋、3条のヘラ描沈線紋の順に施文されている。さらに、頸部には4条+ α の断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれていた。

1135は、口頸部内外面をナデ調整により仕上げられている。その後、頸部に9条+ α のヘラ描沈線紋が描かれている。1136も1135同様、ナデ調整により仕上げられている。

1137は、口縁部外面をハケ調整、体部内面をナデ調整により仕上げられている。他の部位は磨滅のため観察できない。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1138は体部中位のみ残存する。内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。肩部に3条の、体部の最大径にあたる位置に4条の突帯が貼り付けられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1139も1138とほぼ同じ特徴を有する土器である。ただし、1139は突帯が肩部に4条+ α 、体部最大径部に5条貼り付けられている。

1140は肩部の一部で、内面をナデ調整により仕上げられている。4条の突帯が確認でき、

第6節 V区の調査

下端部にもうひとつの突帯の痕跡を確認できる。最も上側の突帯には刻み目が施されている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。胎土・色調等の特徴から、次の1141と同一個体の可能性も考えられる。

1141も肩部の小片で、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。上部に3条の貼付突帯が残存する。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。先述したように、土器の特徴から、1140と同一個体の可能性も考えられる。

1142は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。胎土等の特徴から、上記の体部片のどれかと同一個体の可能性が考えられる。特に、1140・1141と同一個体の可能性が強い。

1143は頸部の一部で、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。5条の突帯が貼り付けられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1144も内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。4条の突帯が貼り付けられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1145は小片のため径を復元することはできない。内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。7条の突帯が貼り付けられ、最も上側の突帯には刻み目が施されている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1146も小片のため径の復元は困難である。外面はハケ調整により仕上げられているが、内面については磨滅のため観察できない。外面には2条の平行する突帯が山形もしくは波状に貼り付けられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1147は内面をナデ調整により仕上げられている。外面には7条の貼付突帯が残存する。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

蓋 1148の1個体である。内面を指オサエとナデ調整により、外面をハケ調整後一部ナデ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕 完形に復元できるものはなく、口縁部から体部にかけて残存する個体（1149・1150・1152）と底部から体部にかけて残存する個体（1151・1153・1154）が出土している。

1149は、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には3条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1150は内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には6条のヘラ描沈線紋が描かれている。この土器については、口縁部の接合痕を確認することができなかったが、後述する1152とほぼ同じ特徴を有することから、いわゆる逆L字形口縁に分類されるものと考えられる。

1152は1150とほぼ同様の特徴を示し、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部に刻み目が施され、頸部以下には4条のヘラ描沈線が描かれている。

1151は内外面ともナデ調整により仕上げられている。1153は、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。1154については、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

鉢 1155の1個体のみ出土している。口径49.5cmを測る大型の鉢である。内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。頸部直下に4cm×1cmの把手が5箇所に貼り付

けられている。ほぼ等間隔に貼り付けられていることから、当初は6箇所貼り付けられていたものと推定される。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK168

検出状況 当調査区中央北部に位置する（第149図）。SH15の東側、SK171の北東側、SK183の東側、SD119の北側にあたる。SK171・SD119と一部接するが、明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は、若干の歪みはあるがほぼ楕円形を呈する。長軸方向で3.14m、短軸方向で2.13mを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは53cmを測る。

埋没状況 5層からなる。下から、暗褐色シルト質極細砂、暗褐色シルト質極細砂、暗灰褐色シルト混じり極細砂～細砂、灰褐色シルト混じり極細砂、暗灰褐色極細砂混じりシルトの順に堆積している。最下層を除いては、黄褐色シルトをブロック状に含むもので、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器の細片は出土しているが、時期を特定できるようなものは出土していない。

時期 出土土器から判断することは困難である。埋土の特徴から、弥生時代と考えられる。

SK169

検出状況 当調査区中央北部に位置する（第149図）。SH12の北西側、SK168の東側、SD119の北側にあたる。SK170と切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模 平面形は溝状を呈する。長軸方向で1.72m、短軸方向で32cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

埋没状況 2層からなり、下から暗褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積し、両層から炭化材が比較的まとまって出土している。

出土遺物 器種の特定できない土器の細片が出土している。

時期 出土土器から、弥生時代中期後半と考えられる。

SK170

検出状況 調査区中央部付近に位置し（第149図）、SK169に切られている。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.03m、短軸方向で60cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。長軸はN50°Wを指向する。

埋没状況 埋土は3層に分層できるが、上の2層は炭を含んだ黒褐色シルト質極細砂で、その下の3層は炭層ないし炭をふくむ褐色シルト質極細砂である。

出土遺物 全く出土していない。

時期 SK169との切り合い関係から、弥生時代中期後半以前と考えられる。

第6節 V区の調査

SK171 (図版163・164 写真図版97・156)

- 検出状況** 調査区中央部付近に位置し (第149図)、SH14に切られている。
- 形状・規模** 平面形は隅丸方形で、長軸方向で2.28m、短軸方向で1.53mを測る。横断面は左右非対称なU字形をなし、最深部における検出面からの深さは50cmを測る。長軸はN60°Eを指向する。
- 埋没状況** 埋土は3層に分層でき、1層は暗灰褐色極細砂混じりシルト、2層は暗褐灰色シルト混じり極細砂、3層は暗灰褐色極細砂質シルトからなる。2層は炭を含み、全ての層から土器が出土している。
- 遺物出土状況** 2個体分の壺の一部と炭の塊が、土坑底に押しつぶされた状態で出土している。
- 出土土器** 壺と甕が出土している。
- 壺** 口縁部、底部から体部にかけて残存するもの (1159)、底部 (1157) が出土しているが、口縁部については小片のため図化できなかった。
- 1159は残存高38.3cm、最大径35.2cmを測る比較的大型の土器である。内外面ともハケ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1157は内面をナデ調整、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。底部中央に径8mmの穿孔が認められる。焼成前に穿孔されたものと考えられる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- この他、図化できなかった口縁部片には、口縁端部に刻み目が施され、外面には刻み目突帯が貼り付けられている。
- 甕** 口縁部片 (1156・1158) のみが出土している。
- 1156は内外面ともナデ調整により仕上げられている。1158も内外面ともナデ調整により仕上げられ、頸部以下に4条のヘラ描沈線紋が描かれている。
- この他図化できなかった口縁部に、逆L字形をなすものが認められる。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK172 (図版164)

- 検出状況** 当調査区中央西部に位置する (第149図)。SK173の北東側、SK176・SK186の東側に位置する。SH13に切られている。このため、当遺構の一部を欠く。
- 形状・規模** 平面形は長楕円形を呈し、長軸方向で3.58m、短軸方向で1.70mを測る。横断面は緩やかなV字形をなし、最深部における検出面からの深さは38cmを測る。
- 埋没状況** 3層からなり、下から褐灰色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂の順に堆積していた。各層に土器片・炭片が含まれ、また黄褐色シルトがブロック状に含まれていたことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 甕** 口縁部 (1160) と底部 (1161) が出土している。
- 1160は内外面とも磨滅のため調整法は観察できない。1161は内外面ともハケ調整により仕上げられている。

- 他 粘土塊が数点出土している。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。
- SK173 (写真図版97)
- 検出状況 当調査区中央西部に位置する (第149図)。SK174の南側に隣接し、SK175の東側、SD98の北側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.14m、短軸方向で88cmを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。
- 埋没状況 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。土器の細片・炭片を含み攪乱されていることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。
- 壺 体部片が出土している。1条+ α の刻み目突帯が貼り付けられている。
- 甕 口縁部片が2個体分出土している。いずれも口縁部が如意形をなす。1個体は、7条のヘラ描沈線紋を描き、口縁端部に刻み目を施している。もう1個体は、口縁端部の刻み目やヘラ描沈線紋等は全く施されていない。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。
- SK174 (写真図版97)
- 検出状況 当調査区中央西部に位置する (第149図)。SK173の北側に隣接し、SK174の南西側、SK175の北東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で84cm、短軸方向で74cmを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。
- 埋没状況 灰黄褐色極細砂混じりシルト質極細砂1層からなる。土器の細片・炭片を含み攪乱されていることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物 壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれる。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。
- SK175
- 検出状況 SD98の西端の北側に位置する (第149図)。SD98とSD121に切られており、南側半分はSD98のために大きく削平されている。
- 形状・規模 平面形は半円形で、長軸方向で1.50m、その直交方向で85cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。
- 出土土器 器種の特定できない土器片が出土している。土器片には凹線紋が認められる。
- 時期 SD121との切り合い関係、および出土土器から判断して弥生時代中期後半と考えられる。

第6節 V区の調査

SK176 (図版164 写真図版190)

- 検出状況** 当調査区中央西部に位置する (第149図)。SK186の南側に隣接し、SK175の北側、SK172の西側にあたる。SD121に切られているため、当遺構の一部を欠く。
- 形状・規模** 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.65m、短軸方向で1.14mを測る。横断面は深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。
- 埋没状況** 5層からなる。下から、灰黄褐色シルト質極細砂、暗灰黄褐色シルト質極細砂、暗褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。各層に土器片と炭片を含み、攪乱されていることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 壺・甕・鉢の各器種が出土している。
- 壺** 底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 甕** 口縁部と体部片・底部が出土しているが、図化できたのは底部 (1162) に限られる。1162は内外面ともナデ調整により仕上げられ、底部中央よりややずれた位置に径1.3cmの穿孔が認められる。図化できなかった口縁部は如意形をなすものである。体部片にはヘラ描沈線紋と半截竹管による山形紋が施されている。
- 鉢** 如意形をなす口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 石器** S91は石包丁の破片である。おそらく直線刃の半月形のものの一部であろう。刃は両刃である。石材は灰白色～暗灰色の凝灰質砂岩と砂質泥岩である。残存長5.05cm、幅3.4cm、厚さ0.75cm。重さ12.5g。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK177

- 検出状況** SH14の西側に位置する (第149図)。SK178を切っている。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で2.05m、その直交方向で1.30mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは53cmを測る。底部での規模は長軸方向で1.20m、その直交方向で65cmを測る。
- 埋没状況** 上層は褐灰色極細砂質シルトで、土器・炭を含んでいる。下層は灰色極細砂混じりシルト質極細砂で炭を含んでいる。
- 出土遺物** 遺物は特に出土していない。
- 時期** 時期を明確にすることはできない。

SK178 (図版164 写真図版191)

- 検出状況** 調査区中央西端に位置する (第149図)。SH14の西側にあたる。SK177に切られているため、当遺構の約1/3を欠く。
- 形状・規模** 平面形は不整形気味であるが楕円形を呈し、長軸方向で3.35m、短軸方向で3mを測る。横断面は深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況 3層からなる。下から、にぶい黄褐色シルト質極細砂、黒褐色極細砂質シルト、黄灰色シルト質極細砂の順に堆積している。各層とも土器片と炭片を含み攪乱されていることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 石器が出土している。

S92はサヌカイト製の尖頭器である。石錐の可能性もある。長さ4.95cm、幅1.60cm、厚さ0.6cm。重さ4.5g。

ほかに図化していないが、写真図版191にみられるような軽石（S98）が出土している。重さ69.7gである。

時期 出土石器から弥生時代中期と考えられる。

S K 1 8 0（図版165～167 写真図版98・99・157～159）

検出状況 調査区北隅付近、SH16の南西コーナーに接している（第149図）。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で2.05m、短軸方向で1.65mを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは50cmを測る。長軸はN35°Wを指向する。

埋没状況 3層に分層できた。1層は黄褐色極細砂、2層は褐灰色シルト質極細砂、3層は褐灰色シルト質極細砂からなる。どの層も炭や土器を含むが、1層は土器の量が少なかった。

遺物出土状況 1層を除去した段階で、土坑全体にかなり大きな破片の土器が散布している状況が確認できた。それらの破片を図化し、2層を除去した段階で、完形の土器が土坑の底付近に置かれていることが判明した。土坑底には完形の4個体の壺と1個体の甕が口縁部をばらばらな方向に向けて横たわっており、ほかに数個体の押しつぶされた土器が隙間を埋めるように散らばり、足の踏み場にも困るような状態であった。

出土遺物 壺・甕・鉢の各器種が出土している。

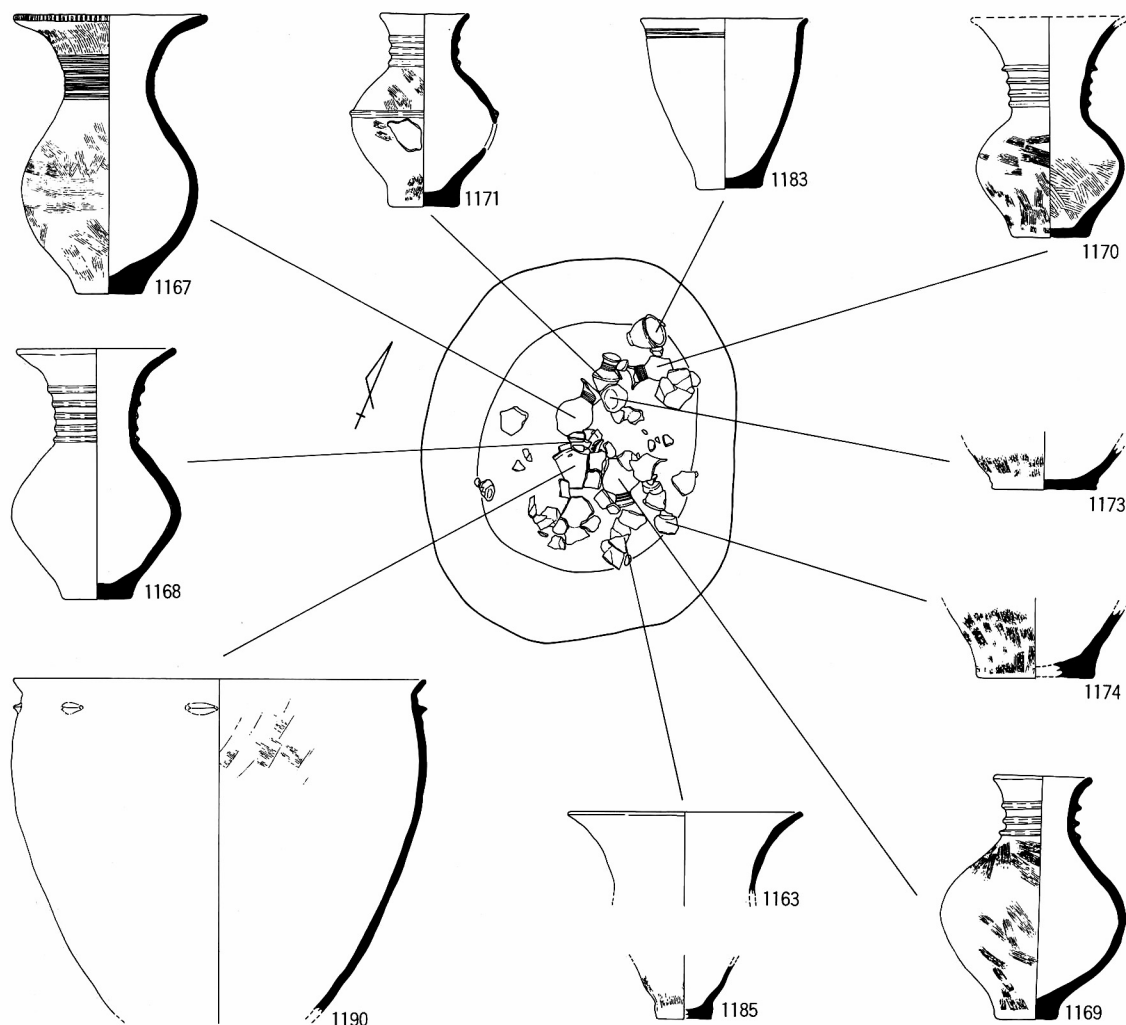
壺 ほぼ完存する個体（1167～1171）から口縁部片（1163～1166・1172）・底部片（1173・1179）などかなりまとまって出土している。

完形土器 1167は口縁部の一部を除いてほぼ完存する広口壺である。口縁部～体部内面をナデ調整、同外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部には13条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1168も、口縁部の一部を除いてほぼ完存する広口壺である。口縁部内外面および体部内面をナデ調整により仕上げられている。体部外面については磨滅が著しく明確に観察できないが、わずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。頸部には5条の突帯が貼り付けられている。貼付突帯の断面は台形もしくは蒲鉾形をなし、当土坑の相伴土器を除く本遺跡出土の土器の貼付突帯とは特徴を異にする。胎土中には3mm以下の砂粒が含まれているが、他の土器ほど多くはない。

1169は、口縁部内外面および体部内面をナデ調整、体部外面をハケ調整とナデ調整により仕上げられている。頸部には3条の突帯が貼り付けられている。貼付突帯の断面は、1168同様、台形もしくは蒲鉾形をなす。胎土中には4mm以下の砂粒が含まれているが、1168同様他の土器ほど多くはない。

1170も口縁端部を欠くが、他はほぼ完存する。口縁部内外面はナデ調整、頸部内面は指



第154図 SK180土器出土状況

オサエと指ナデ調整、体部内外面はハケ調整により仕上げられている。頸部には4条の突帯が貼り付けられている。貼付突帯は、1169・1170とは異なり断面三角形をなす。胎土中には4mm以下の砂粒が含まれている。

1171は、口頸部内外面および体部内面をナデ調整、体部外面をハケ調整により仕上げられている。頸部に3条の、体部中央に1条の突帯が貼り付けられている。各貼り付け突帯とも断面は台形もしくは蒲鋒形をなし、1169・1170と同様の特徴を示す。また、体部下半には3cm×4cmの不整形な穿孔が認められる。焼成後になされたものと考えられる。胎土中には3mm以下の砂粒が含まれているが、上記の土器同様、当該期の本遺跡出土土器に比べると多くはない。

口縁部 1163は内外面ともナデ調整により仕上げられているが、内面にわずかにハケ調整の痕跡が観察される。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1164は長頸の広口壺の口頸部である。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

1165は内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目を施した後1条のヘラ描沈線紋が描かれている。また、内外面に刻み目突帯が1条ずつ貼り付けられている。外面の方が突帯の規模が大きい。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1166は小片のため、口径を復元することはできない。内外面ともナデ調整により仕上げ

られている。口縁端部には刻み目が施された後、1条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1172は内外面とも磨滅のため調整は明確ではないが、ナデ調整により仕上げられたものと考えられる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

- 底部** 1173と1179の2個体分図化した。
- 1173は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。1179は大型壺の底部と考えられ、内面はナデ調整により仕上げられている。外面は磨滅のため観察できない。
- 甕** ほぼ完存する土器(1183)および大型甕(1190)の他に、口縁部片(1180~1182・1186)と底部片(1174~1179・1184・1185・1187~1189)が出土している。
- 完存土器** 1183は内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部以下に2~3条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 大型甕** 1190の1個体が出土している。口径43.2cm、残存高35.2cmを測る大型の甕である。口縁部内外面および体部内面をナデ調整、体部外面をハケ調整により仕上げられている。頸部直下に3.5cm×1.3cmの把手が2箇所に貼り付けられている。この2個の把手は対になる位置にはないことから、当初は10箇所に貼り付けられていたものと考えられる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 口縁部片** 1180は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部に刻み目を施し、頸部以下に3条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。ただし、ヘラ描沈線は螺旋状に1本描きで描かれており、部分的に2条の箇所も認められる。
- 1181も、内外面をナデ調整により仕上げられている。頸部以下に7条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1182は、口縁部内外面および体部内面をナデ調整により、体部外面をハケ調整により仕上げられている。頸部以下には6条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1186は小片のため、口径を復元することはできなかった。内外面ともナデ調整により仕上げられ、頸部以下に5条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 底部** 1174~1178は大型の底部で、壺の底部の可能性も否定できないが、本報告では甕の底部として報告することにする。1174・1177は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。1175・1176・1178は内外面ともナデ調整により仕上げられている。いずれも5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1184・1185・1187~1189は小型の底部である。1184・1185・1189は、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。1187・1188は内外面ともナデ調整により仕上げられている。なお1189の底部のほぼ中央には径1.3cmの穿孔が認められる。
- 蓋** 1191の1個体のみである。内面および天井部はナデ調整により仕上げられている。外面は磨滅のため良好に観察できないが、わずかにハケ調整の痕跡が認められる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

第6節 V区の調査

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK181

検出状況 調査区南西部で検出した（第149図）。SK182の南東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形をなし、長軸方向で1.14m、短軸方向で53cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

埋土 2層からなり、下から黒褐色極細砂、暗褐色極細砂の順に堆積している。下層には炭片も含まれている。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。埋土の特徴から弥生時代を中心とした時期と考えられる。

SK182

検出状況 調査区南西部で検出した（第149図）。SK181の北西側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は隅丸長方形をなし、長軸方向で76cm、短軸方向で40cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。

埋土 3層からなり、下から暗赤褐色シルト質極細砂、黒褐色極細砂、暗褐色極細砂の順に堆積している。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が全く出土せず、他の遺構との切り合い関係もないため、時期の特定は困難である。

SK183

検出状況 調査区北西部で検出した（第149図）。SK168の南西に隣接し、SK184の南側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は溝状をなし、長軸方向で1.30m、短軸方向で30cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmを測る。

埋土 黒褐色極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器の小片が出土しているが、器種・時期の特定は困難である。

時期 出土土器からの判断は困難である。埋土の特徴から弥生時代中期を中心とした時期と考えられる。

SK184

検出状況 調査区北西部で検出した（第149図）。SH14の北東側、SK183の北側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形をなし、長軸方向で42cm、短軸方向で18cmを測る。横断面は皿形をなし、

最深部における検出面からの深さは6cmを測る。

- 埋 土** 2層からなり、下からにぶい黄褐色シルト混じり極細砂、黒褐色極細砂の順に堆積している。各層に土器の小片・炭片を含み、黄褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 土器の小片が出土している。器種の特定は困難であるが、胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時 期** 出土土器の特徴から、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SK185 (図版168 写真図版156)

- 検出状況** 調査区北西部で検出した(第149図)。SH14の北東側、SK183の北側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形をなし、長軸方向で50cm、短軸方向で40cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。
- 埋 土** 2層からなり、下から暗黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積していた。両層とも土器片・炭片を含み、黒褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺の口縁部(1192)と底部(1193)が出土している。
- 口縁部** 1192は広口壺の口縁部である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には2条のヘラ描沈線紋と刻み目が施されているが、その前後関係は明確にできない。また、口縁部内外面に刻み目を施した貼付突帯が各1条認められる。胎土中には3mm以下の砂粒が含まれている。
- 底 部** 1193は外面をナデ調整により仕上げられている。内面は磨滅のため観察できない。
- 時 期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK186 (図版168)

- 検出状況** 調査区南西部で検出した(第149図)。SH14の南側、SK176の北側にあたる。当土坑の東端がSD121と接しているが、他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は溝状をなし、長軸方向で2.05m、短軸方向で35cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmを測る。
- 埋 土** 黒褐色シルト混じり極細砂1層からなる。土器片や炭片を多く含み、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 2条+αの突帯を貼り付けた体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 甕** 底部片(1194)が出土している。内面はナデ調整により仕上げられているが、外面は磨滅のため観察できない。底部のほぼ中央に径1cmの穿孔が認められる。
- 時 期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

第6節 V区の調査

SK187 (図版168 写真図版156)

- 検出状況** 調査区中央部で検出した(第149図)。SH13の南東側、SK158の南西側、SD118の西側にあたる。一部をSD116に切られている。
- 形状・規模** 平面形は溝状をなし、長軸方向で3.70m、短軸方向で70cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは8cmを測る。
- 埋土** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。土器片や炭片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 口縁部片・頸部片・体部片・底部片が出土している。
- 口縁部** 図化できたのは1196の1個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 頸部片** 小片のため図化できなかったが、6条+αの半截竹管紋が描かれている。
- 体部片** 1197の1片を図化した。小片のため径の復元は困難である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。外面には、5条を1単位とする櫛もしくはヘラ先を櫛状にしたものによる帯状沈線が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- この他、ヘラ描沈線紋を施した小片も出土している。
- 底部** 小片のため図化できなかった。
- 甕** 口縁部片・体部片・底部片が出土している。
- 口縁部片** 2点(1198・1199)図化した。
- 1198は小片のため口径は復元できない。内外面をナデ調整により仕上げられている。頸部以下には6条のヘラ描沈線が認められる。胎土中には3mm以下の砂粒が含まれている。
- 1199は、口縁部内外面および体部内面をナデ調整により、体部外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が、頸部以下には10条のヘラ描沈線紋がそれぞれ施されている。胎土中には3mm以下の砂粒が含まれている。
- 体部片** 小片のため図化できなかった。ヘラ描沈線紋と円形刺突紋が施されている。
- 底部片** 1200と1201の2個体図化した。両個体とも内外面の調整は磨滅のため観察できない。1200の底部中央には径1.8cmの穿孔が認められる。焼成後になされたものである。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK188

- 検出状況** SD98より南側の西端にあり(第149図)、SK189の西側に位置する。土坑の南半分は調査区外へ延びるため不明である。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で80cm、その直交方向で70cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは8cmを測る。
- 出土遺物** 壺の底部が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。弥生時代中期の特徴を示すものと同後期を示すものが出土している。
- 時期** 出土土器から時期を特定することは危険である。埋土の特徴から、土壤層(包含層)をブロック状に含むもので、上記の土器はこのなかに含まれていたものと考えられる。した

がって、当遺構の時期は、少なくとも弥生時代後期以降と考えられる。

SK189

- 検出状況** 調査区中央南西部に位置する（第149図）。SD98の南西、SK188の東側にあたる。北東側をSD98に切られており、一部を欠く。
- 形状・規模** 一部を欠くため、平面形を明確にすることは困難であるが、隅丸長方形もしくは溝状を呈するものと考えられる。長軸方向で1.2m検出し、短軸方向で1mを測る。横断面は浅い逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは9cmを測る。
- 埋没状況** 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。土器片・炭片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。胎土の特徴から、弥生時代中期の壺と考えられる。壺の底部片が出土している
- 時期** SD98との切り合い関係、出土土器から判断して、弥生時代中期と考えたい。

SK190

- 検出状況** 調査区中央部に位置する（第149図）。SH13の南東、SK187の北西にあたる。SD116に切られているため、一部を欠く。
- 形状・規模** 一部を欠くが、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で1.20m検出し、短軸方向で74cmを測る。横断面は緩やかなU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。
- 埋没状況** 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 土器が出土していないため、土器から時期を特定することはできない。奈良時代のSD116に切られていることから、奈良時代以前と考えたい。

SK191

- 検出状況** 調査区中央部に位置する（第149図）。SH11の北西側、SK146の西側にあたる。SD118に切られているため、当遺構の約1/2を欠く。
- 形状・規模** 一部を欠くが、平面形は楕円形もしくは円形を呈するものと考えられる。長軸方向で60cm検出し、短軸方向で35cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。
- 埋没状況** 2層からなり、下から暗黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。特に上層には土器片が比較的多く含まれていた。
- 出土遺物** 土器の細片は少なからず出土しているが、器種・時期を特定できるようなものは出土していない。
- 時期** 出土土器から時期を特定することは困難である。SD118との切り合い関係から、弥生時代前期と考えられる。

第6節 V区の調査

SK192

- 検出状況** 調査区中央南部に位置する（第149図）。SK131の南側、SK193の西側、SD110の南西端部の南西側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形に近く、その規模は45cm×55cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは33cmを測る。
- 埋没状況** 暗灰黄色シルト質極細砂1層からなる。黄褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 土器が出土していないため、時期を特定することはできない。

SK193

- 検出状況** 調査区中央南部に位置する（第149図）。SK192の東側、SD98の北側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形に近く、その規模は52cm×49cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは40cmを測る。
- 埋没状況** 暗黄褐色シルト質極細砂1層からなる。黄褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 土器が出土していないため、時期を特定することはできない。

SK194

- 検出状況** 調査区東部土坑群中にある（第149図）。SK98の北側、SD105の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は溝状を呈し、長軸方向で70cm検出し、短軸方向で28cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。
- 埋没状況** 2層からなり、下から褐灰色シルト質極細砂、灰褐色シルト質極細砂の順に堆積している。上層に土器の包含が認められた。黄褐色シルトおよび黒褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。
- 壺** 頸部と底部片が出土している。頸部には5条+ α のヘラ描沈線紋が描かれている。
- 甕** 口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は如意形をなすものである。体部片には櫛描直線紋が描かれている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SK195（図版168）

- 検出状況** SH12中央土坑の西側に位置する（第149図）。SH12によって全体的に削平されている。
- 形状・規模** 平面形は隅丸方形で、長軸方向で40cm、その直交方向で26cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは8cmを測る。底部での規模は長軸方向で22cm、

その直交方向で6 cmを測る。

- 埋没状況 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 遺物出土状況 土坑の底から石と甕の底部片が出土している。
- 出土遺物 甕の底部片(1195)のみが出土している。内面をナデ、外面をハケ調整により仕上げられている。胎土中には5 mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK196 (図版168・169 写真図版159)

- 検出状況 当遺構は、調査区周囲に排水溝を掘削した際に南西部で確認したものである。このため、十分な調査をすることができなかった。ただし、土器が比較的まとまって出土しているため、土坑として報告することにしたものである。

形状・規模 上記の理由から、明確にすることはできない。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層が堆積していた。人為的に埋められたものと考えられる。

出土土器 甕・蓋・鉢の各器種が出土している。

甕 底部片も含めて4個体分(1202・1203・1205・1206)図化した。

1202は、口径31.4cm、残存高40.8cmを測る比較的大型の甕である。口縁部内外面および体部内面をナデ調整、体部外面をハケ調整により仕上げられている。頸部以下には10条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4 mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1203は口縁部から頸部にかけて残存する。内外面をナデ調整により仕上げられている。口縁部は逆し字形をなすもので、上端面には三角刺突紋が2列にわたって施されている。また口縁端部には刻み目が施されている。さらに、頸部以下には7条+ α のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4 mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1205・1206の底部は、いずれも内外面をナデ調整により仕上げられている。

蓋 1204の1個体である。つまみ径2 cmと小型の蓋である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には4 mm以下の砂粒が多量に含まれている。

鉢 1207の1個体である。口径51.2cm、器高36.5cmを測る大型の土器である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部直下に径5 mmの穿孔がほぼ等間隔で5箇所に分たれているが、2箇所は貫通していない。復元される頸径を考慮に入れると、当初は6箇所に分たれていたものと考えられる。胎土中には5 mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK197 (図版172)

検出状況 調査区東側の土坑群の中にあり、SH10の西側に位置する(第149図)。SX03・SD106・SK105に切られている。

形状・規模 平面形は不整形で、長軸方向で2.50m、その直交方向で82cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。底部での規模は長軸方向で2.16m、その直交方向で57cmを測る。

出土遺物 壺・甕・蓋の各器種が出土している。

第6節 V区の調査

- 壺** 頸部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。3条+ α の突帯が貼り付けられている。
- 甕** 如意形を呈する口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 蓋** 1239の1個体が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK198 (図版170・171 写真図版160・161)

検出状況 第2次確認調査(No.35トレンチ)で確認した土坑である(第149図)。当調査区の南西側にあたる。確認調査で検出した遺構のため、十分な調査を行うことができなかった。

形状・規模 上記の理由から、明確にすることはできない。

埋土 暗褐色シルト質極細砂1層が堆積していた。

出土土器 壺・甕・蓋の各器種が出土している。

壺 底部を含めて6個体(1216・1217・1219~1222)図化している。

1216は肩部まで残存する広口壺である。口頸部内外面および体部内面をナデ調整、体部外面をハケ調整により仕上げられている。頸部には4条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1217も肩部まで残存する広口壺である。口縁部~体部内面および体部外面はナデ調整により、口縁部外面はハケ調整により仕上げられている。口縁端部には1条のヘラ描沈線紋を施した後、刻み目を施している。また、口縁部上端部内面には三角刺突紋が2列にわたって施されている。頸部には断面三角形をなす8条の突帯が貼り付けられている。

1219も内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。頸部には5条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1220は頸部から体部中位まで残存する土器であるが、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

1221・1222は体部中位から底部まで残存する土器である。2個体とも内外面をナデ調整により仕上げられている。1221の体部下半の一部にハケ調整痕がわずかに認められる。

甕 底部を含め8個体(1223~1230)図化した。

1223は完形に復元された土器である。口縁部~体部内面はナデ調整、体部外面はハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が、頸部以下には5条のヘラ描沈線紋がそれぞれ施されている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1224はほぼ完存する土器である。口縁部内外面はナデ調整により仕上げられているが、体部内外面については磨滅のため観察できなかった。口縁端部には刻み目が施され、頸部直下には5条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1225は体部中位から底部にかけて残存する土器である。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1226は内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には9条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1227は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、

頸部直下には9条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1228も1227とほぼ同様の特徴を有し、頸部直下のヘラ描沈線紋は7条描かれている。

1229は口縁端部をわずかに欠くが、ほぼ完存する。口縁部内外面および体部内面はナデ調整により、体部外面はハケ調整により仕上げられている。頸部以下には7条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1230は内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。

蓋 1218の1個体が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁部内面には環状に煤の付着が認められる。煤の付着範囲から、口径約19cmの甕とセットとなっていたものと考えられる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK199 (図版169 写真図版159)

検出状況 第2次確認調査(No.36トレンチ)で確認した土坑である。当調査区の北側にあたる。確認調査で検出した遺構であるため、十分な調査はできなかった。

形状・規模 上記の理由から、明確にすることはできない。

埋土 暗褐色シルト質極細砂1層が堆積していた。

出土土器 壺と甕が出土している。

壺 底部を含めて3個体(1208~1210)図化している。

1208は内面をナデ調整により仕上げられている。外面については一部頸部付近でハケ調整の痕が認められる以外は、磨滅のため観察できない。口縁端部には指頭圧痕状の刻み目が施されている。頸部には2条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1209は内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部には5条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1210は壺の底部で、外面をヘラ磨きにより、内面をナデ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕 底部を含めて5個体(1211~1215)図化している。

1211は、口縁部内外面をナデ調整により仕上げられているが、体部内外面については磨滅のため観察できない。

1212は内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部に刻み目が施され、頸部以下には4条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1213・1214の底部片は、内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。1215については、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

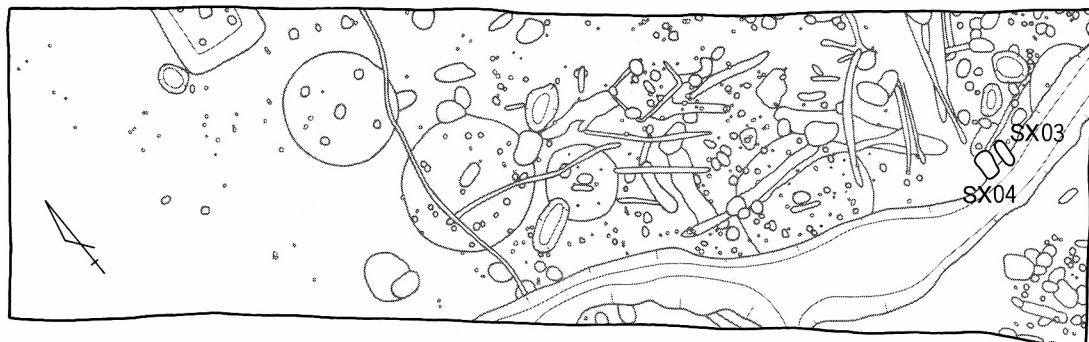
時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

第6節 V区の調査

SK200 (図版172)

- 検出状況** SK196同様、調査区南西側に排水溝を掘削した際に検出した土坑である。土器が一括して出土したため、土坑として報告することにする。十分な調査を行うことができなかったため、出土遺物を中心に報告する。
- 出土土器** 壺・甕・蓋の各器種が出土している。
- 壺** 底部を含めて3個体(1231~1233)図化している。
- 1231は口縁部片であるが、小片のため口径を復元することはできなかった。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1232は口縁部を除いて完形に復元できる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には6mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1233は内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。
- 甕** 口縁部片4個体分(1234~1237)が出土している。
- 1234は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。1235・1236は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。
- 1237は小片のため口径を復元することはできなかった。内外面はナデ調整により仕上げられている。頸部以下には8条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 蓋** 1238の1個体が出土している。内外面をナデ調整により仕上げられている。
- 時期** 出土土器から判断して弥生時代前期と考えられる。

V. 墓



第155図 V区第2面 墓

SX03 (図版174 写真図版100)

検出状況 調査区東部の土坑群中に位置する (第155図)。SX04の東側、SK105の南側にあたる。SD98・SK197を切っている。

掘り方 平面形は長方形を呈し、その主軸方向はN 5°Eを指向する。主軸方向で1.37m、その直交方向で56cmを測る。掘り方中央部における検出面からの深さは12cmである。

棺 平面形は長方形を呈するが、墓坑の中央部には位置せず北側に偏っている。棺材そのものは遺存していなかった。主軸方向で72cm、その直交方向で43cmを測る。墓坑内において棺を検出した面からの深さはわずか4cmである。後述するように、棺内の埋土がシルトであることから、棺の底板の痕跡部分を検出した可能性も考えられる。

なお、棺内からは副葬品等は出土していない。

埋土 棺内には黒褐色シルト、墓坑内には黒褐色極細砂が堆積していた。

出土遺物 須恵器の坏Bが出土している。

時期 出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

SX04 (図版174 写真図版100・161)

検出状況 調査区東部に位置する。SX03の西、SK197の南にあたる。SD98を切っている。

形状・規模 平面形は長方形を呈し、その主軸方向はN 4°Eを指向する。主軸方向で1.39m、その直交方向で72cmを測る。掘り方中央部における検出面からの深さは27cmである。

棺 平面形は長方形を呈し、墓坑のほぼ中央部に位置する。底部には、棺の底板と考えられる板材の一部が遺存していた。1m×60cmの範囲に残存する。厚さは約6mmである。

なお、棺内からは土師器の皿が2個体出土している。

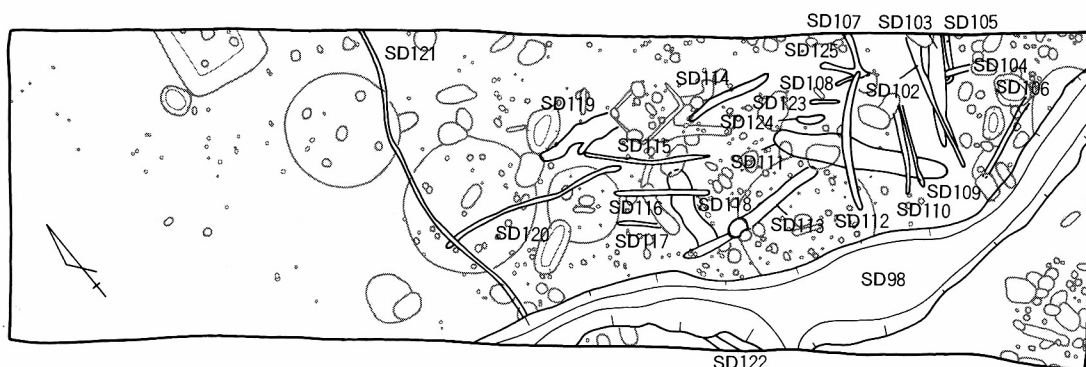
埋土 棺内には黒色シルト質極細砂、墓坑内下層には黒褐色シルト質極細砂、上層には黒褐色極細砂～細砂が堆積していた。

出土遺物 棺内から土師器の大皿 (1241) と小皿 (1242) が各1個体ずつ出土している。

大皿は、口縁部を2段の横ナデ調整により仕上げられ、底部はナデおよび指オサエにより仕上げられている。小皿は回転台により仕上げられ、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から判断して、12世紀前半と考えられる。

VI. 溝



第156図 V区第2面 溝

SD98 (図版176~180 写真図版101・161~168)

検出状況

V区の東隅から南西辺の中央付近に向けて、IV区から蛇行しながら流れている。

形状・規模

溝の方向はおおよそ東から西である。長さはV区のみで43.0m、IV区と合わせると51.8mが検出された。カーブを描いている部分で溝幅がかなり広がっており、検出面で1.78~6.00m、溝底で0.48~5.00mを測る。断面の形状は部分によってかなり異なり、逆台形またはU字形を呈する。検出面からの深さはV区が一番深いところで1.40m、IV区では89cmである。溝底の標高はIV区の東端で6.42m、西端で6.38mであり、V区の東端で6.02m、西端で6.18mとなり、東から西方向へ流れていたと思われる。

埋没状況

埋土は部分によって異なるが、6ないし7層に分層できる。いずれの断面でも最上層は黒褐色ないし灰褐色の極細砂~シルト質極細砂で、その下にやや色の薄いシルト質極細砂が溜まる。最下層はやや色の濃い灰黄褐色シルト質極細砂である。V区では特にブロック土の混じる人為的な埋め土の堆積状況が観察できた。また、各層から大量の遺物が出土しており、炭を含む層もある。

出土遺物

土師器・須恵器・瓦といずれもまとまった量の遺物が出土している。図版177はいわゆる供膳形態を並べている。1243~1247・1280が土師器であり、残りが須恵器である。両者の実測した個体数の比率は6:38で、須恵器が土師器のおよそ6倍である。

土師器

土師器の器種には、1243~1247や1280の坏・皿類や、1287~1314の鉢・甕・カマド・把手類、1315・1316の蛸壺がある。

坏 A

1243~1247は土師器の坏Aである。1243は欠損のため底部は不明であるが、丸底の椀に近い形態である。口縁端部は小さく玉縁状にしあげている。外面上半はハケメ、下半はハケメの後横方向の細かいヘラミガキをまばらにほどこしている。内面は磨滅のため単位は不明であるが、ヘラミガキをほどこしている。外面は橙色、内面は灰白色である。1244・1245は口径13.9cmと14.7cm、器高3.1cm前後と法量は近いが、口縁端部のしあげ、底部外面のヘラケズリの範囲などの製作技法は異なっている。1244は浅黄橙色ないし橙色で、1245は橙色ないしにぶい黄橙色である。1246は推定口径15.5cm、器高3.8cmと大型の坏Aである。内外面とも調整は不明であるが、底部との境はヘラケズリしていたらしい。内面は橙色で朱塗りの可能性がある。外面は浅黄橙色である。1247は推定口径15.8cm、器高2.9cmと浅い大型の坏Aである。口縁端部は内側に小さく丸く巻き込む。口縁部は内外面

ともヨコナデ、底部は内面は不定方向のナデ、外面はヘラケズリの後ナデている。外面は朱塗りの可能性がある。

皿 B 1280は皿Bである。口縁部はわずかに外反しつつひらき、端部は肥厚し丸くしあげている。口径16.8cm、器高2.9cm。底部中央が欠損している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面は多方向のナデ、外面は多方向のヘラケズリの後ナデている。

鉢 1287・1288は口のすぼまった鉢である。1287は端面をカットしている。調整はおもにヨコナデで、外面の一部にヘラケズリ後ナデたらしい部分がある。1288の端部は小さく尖るようにおさめている。外面の上部はヨコナデ、それ以下はナデ、下端付近の一部にハケメがみられる。内面はミガキがほどこされている。

甕 1289～1293は甕である。1289は口径14.2cm、器高13.25cmの小型の丸底の甕である。胴部はほぼ球形で、短くひらく口縁部は先細りで、頸部の器壁が最も厚い。胴部外面は縦方向のハケメ、内面の上半は横方向、下半は縦方向の板ナデである。口縁部内面下半には横方向の断続的なハケメがほどこされている。1290・1292にも同様のハケメがみられる。1290は注口のある甕の口縁部である。推定口径14.8cmと小型である。頸部のくびれは不明瞭であるが、1289と同様に頸部の器壁が最も厚く、内面にははっきりした稜がめぐる。胴部外面は縦方向のハケメ、内面はユビオサエの後ナデである。1291は推定口径18.4cm、口縁部はあまりひらかず、口縁端部はカットしている。1292は推定口径27.8cm、腹径26.3cm、残存高29.3cmの長胴甕である。口縁部は直線的にひらき、端部はカットしている。胴部は頸部からわずかにひろがるだけで、ほとんどふくらみのない円筒状である。底部は丸底であろう。胴部外面は縦方向のハケメ、内面はユビオサエおよびユビナデである。1293の口縁は外反気味にひらき、胴部は頸部から直線的にひろがる。胴部内面は横方向のハケメまたは板ナデをほどこしている。

羽釜・鍋 1294・1295は時期的に下る平安時代の土器である。1294は羽釜である。厚い突帯状の鏝が口縁端部をわずかに下がった位置に取りつく。外面はハケメ、内面は板ナデがほどこされている。1295は鍋である。底部を欠くが、丸い胴部に直線的に大きくひらく口縁部がつく。頸部及び口縁端部直下にそれぞれ1条の凹線がめぐる。口縁部内面には断続的な横ハケがみられる。胴部内面はユビナデである。

壺ほか 1296・1297は類例に乏しい器種である。1296は壺の肩部である。外面はナデ、内面は横方向のヘラケズリである。色調は外面はにぶい橙色、内面は灰白色である。全体の形状は不明である。1297は鍋と考えた。端部は厚く、水平にカットしている。外面はハケメ、内面は強いユビナデもしくはヘラケズリ後ナデたような調整痕が残る。

カマド 1298～1305はカマドの各部である。1298～1300は口縁部付近の破片である。端部はいずれも平坦な面をもち頑丈に肥厚している。1298は一部突帯がのこっており、1300は突帯の剝離痕が残る。外面はハケメの後部分的にナデている。内面はナデまたは板ナデである。1301は庇の部分である。1302～1304は縦方向の突帯の部分である。ススなどが付着している部分がある。1305は横方向の低い突帯がついている。埴輪の可能性もある。

把手 1306～1314は把手である。鍋や甗に付くものである。1306～1312は三角形の粘土板を張りつけるいわゆる舌状把手である。1310・1311は比較的厚みがある。1313は円錐状の粘土

塊からなるいわゆる角状把手である。張りつけた反対側から先の丸い棒状のもので刺突している。時期が古いものである可能性がある。1314は舌状把手のなかでも厚いものである。下面にはヘラの当たった痕跡がある。

蛸 壺

1315・1316は釣鐘形の蛸壺である。外面はナデ、内面は放射状のユビナデである。

須恵器

須恵器の器種には、供膳形態の坏類と貯蔵形態の壺・甕類と硯がある。

坏 A

1248～1262は須恵器の坏Aである。1248は口縁部が内湾し、底部が丸みを帯びている。推定口径11.4cm、器高4.6cm。1249は推定口径11.9cm、器高3.95cm。片口の注口がつく珍しい例である。口縁部の外傾度は小さい。1250・1251は口径13.5～7cm、器高3.7～4.0cmとほぼ同一の法量で、なかほどで器壁が厚くなるよく似たつくりである。また、両者とも灰白色で焼成はやや不良である。粗砂・細砂を多く含む。1250は若干歪んでおり、底部は丸みを帯びている。内面に仕上げナデがある。1251は外面に火ダスキがみられる。以上は比較的古い様相を示すものと考えている。

1252～1255は口縁部は薄く直線的に開くタイプである。口径は10.8～12.7cm、器高3.2～3.6cmである。1255は底部内面に不定方向のナデをほどこす。灰色ないしオリーブ灰色で、やや軟質で粗砂や細砂を多く含む。1256～1259も同様に直線的に開き、口径13.9～14.9cm、器高3.1～3.4cmと浅いタイプである。1257には内外面とも火ダスキがある。1258は見込みの部分に同心円状の沈線がめぐり、「一」のヘラ記号がある。1259の内面にもヘラ記号がある。焼成もやや不良である。

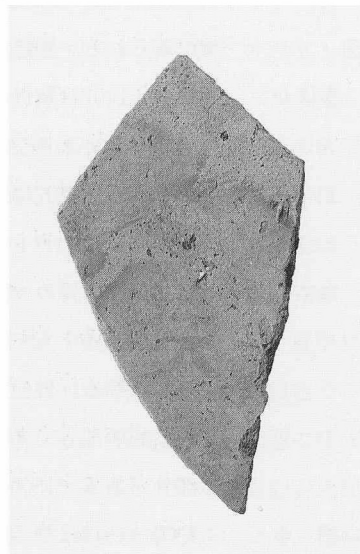
1260は推定口径14.8cm、器高3.7cmで、口縁部は直線的に大きく開く。焼成は不良である。1261は推定口径9.4cm、器高3.8cmで、口が狭く深いタイプである。口縁部は直線的に開き、端部は薄く尖る。1262は推定口径13.6cm、器高4.6cm。歪んでおり、底部は丸くなっている。明緑灰色である。

坏 蓋

1263・1274・1275・1277は坏Bの蓋である。1263は推定口径14.3cm。若干歪んでおり、天井部は丸く、つまみを欠いている。1274・1275は口径16.8cm程度でほぼ同じ大きさであるが、器高は異なり、1274は2.1cmとやや偏平で、1275は2.95cmとやや高い。つまみの形状は若干異なっており、1275の方が中央が突出している。1277は口径18.2cm、器高1.5cmとほとんど偏平である。つまみもボタン状で、中央はほとんど突出しない。

坏 B

1264～1273・1276・1278は坏Bである。1264・1265は口径13cm、器高4cm前後とやや小ぶりのタイプである。口縁部はわずかに外反して開く。1266～1271は口径13～14cm、器高4cm前後と最も普通にみられる法量である。口縁部の外傾度は小さい。高台の形態はさまざまである。1266・1268～1270は高台端部に凹線がめぐり、1276は推定口径16.6cm、器高4.6cm、1278は推定口径20.3cm、器高6.35cmと大型のタイプである。1276の口縁部は内湾気味に開く。1278の口縁部は直線的に開く。端部を欠くが、薄く尖っていたであろう。



第157図 SD98出土墨書土器

1272は高台内周に2つの竹管文がある。また、1273には高台内周に大小の爪形が対になってめぐっている。

1279は高台のある底部の破片である。おそらく椀の底部であろう。

皿 A 1281～1285は皿Aである。1281は推定口径18.8cm、器高2.1cm。口縁部は短くほぼ直に立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ。内面は不定方向のナデをほどこしている。1282・1283は直線的にひらくタイプである。1282は推定口径18.8cm、器高2.55cm。底面は回転ヘラ切りのちナデで板状の圧痕がある。1284・1285は口縁部が内湾気味に低く立ち上がり、口縁部と底部の境界がはっきりしないタイプである。いずれも灰白色で、粗砂を含んでおり、焼成も不良である。なお、1285の外面はススが付着している。

壺 1317～1322は壺類である。1317・1320は平瓶である。1317は天井部が高く、全体に丸みをおびている。体部の下半をヘラケズリしている。1320は底部・体部・天井部の区別が明瞭で、全体に扁平である。また欠損しているが、把手がついている。天井部外面には著しく自然釉が付着している。1318・1319は平瓶の口縁部と考えている。1318はわずかに内湾しつつひらき、口縁端部は先細りに丸くおさめ、中位より下がった位置に1条の沈線がめぐる。1319は直立した後、やや外反してひらく。口縁端部は水平な面をもち、外側に突帯状にわずかに突出している。1317・1318は飛鳥時代の古い様相を示し、1319・1320は奈良時代の新しい様相を示している。

長頸壺 1321は長頸壺の胴部である。算盤玉状の形状で、稜はシャープである。下半にヘラケズリがほどこされているが、単位は不明である。1322は長頸壺または広口壺の胴部である。1321に比べ円筒形に近い。かなり高めの高台が付いている。また、ヘラケズリの単位も明瞭である。

壺 蓋 1323はいわゆる薬壺にともなう蓋である。推定口径18.7cm、器高4.85cmとかなり大きく深い。蓋の端の稜はあまく、外面には著しく自然釉が付着し、調整は不明である。つまみは扁平ながら宝珠形の特徴を残しているが、位置は中心からずれている。

円面硯 1324は円面硯の脚部である。小片のためもとの形状は不明である。脚端は水平な面をもち、少し上に1条の凹線がめぐる。透かしの数や形状は不明であるが、丸みをおびた形であることがわずかに残った部分から推定できる。灰白ないし灰色で、わずかに細砂を含む比較的精良な胎土である。

甕 1325～1329は甕の口縁部である。1325は外反気味にひらく口縁部で、端部はやや大きめの玉縁状に外側に厚くなっている。1326～1328は外反して大きくひらく口縁部で、1326の端部は内側に屈曲し、2段の櫛描波状文をほどこしている。1327・1328の端部は内側につまみあげてナデている。1329は内湾しつつひらくタイプで、2段の櫛描波状文をほどこしている。1326・1329はいずれもかなり大型の甕である。

1330は甕の平底の底部である。2方向の平行タタキをほどこしている。また、下半は不定方向のナデでタタキが消えており、底部付近は回転ヘラケズリをしている。なお、底部周縁に板の圧痕が残る。

瓦 1331～1338は平瓦、1339～1344は丸瓦である。いずれもあまり焼けが良くなく、色調は灰白ないし黄灰色である。

第6節 V区の調査

- 平瓦** 1331の凸面は縦方向の細かいハケメで、凹面は布目が密で一部に模骨痕が残る。また、側面は幅が狭く丁寧に面取りしている。以上の点から飛鳥時代に遡る可能性がある。
- 1332・1333の凸面は縦長の長方形格子の長手のタタキを施している。凹面の布目はやや粗く、1333はかなりほつれている。また、1332の側面は凹面側を面取りしている。
- 1334は横長の長方形格子タタキを施しており、一部の格子内に右下がりの斜線がみられる。狭端面にはヘラ状工具の痕跡が多数ある。凹面の布目は縦方向にナデ消されている。
- 1335の凸面は雑な縦長の長方形格子らしきタタキがみられる。凹面の布目は縦方向に縞状にナデ消されている。
- 1336は斜格子タタキを施しており、凹面は布目の下に糸切痕が残っている。色調は橙～にぶい橙色で、1331～1335までの黄灰色ないし灰白色とは異なる。
- 1337の凸面はごく一部に粗い縄タタキが残るがほぼ全面ナデ消している。凹面の布目はかなり細かい。狭端面には工具痕が2条ある。
- 1338の凸面は凹凸が著しく、タタキ原体は不明である。凹面は布目と糸切痕が残っている。狭端面はヘラ削り後ナデている。
- 丸瓦** 1339～1342は玉縁のある丸瓦である。1339の内面には布の端（継ぎ目）がみえる。1340の内面は布のほつれや、縦方向の板ナデ痕が観察できる。1341の内面は工具で縦方向に強くかきとったような痕跡がある。1343・1344の側面は凸面側を細く面取りしている。1344は凹面側もやや幅広く面取りしている。
- 時期** 出土した遺物から判断して、奈良時代半ば以降から平安時代と考えられる。

SD102

- 検出状況** 調査区東側で検出された（第156図）。北端はSD103を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は北側から南側で、若干東側へ湾曲している。長さは8.80mが検出された。幅は検出面で20～70cm、溝底で4～10cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは7cmである。溝底の標高は北端で6.69m、南端で6.75mであり、南方向から北方向へ流れていたものと思われる。
- 出土遺物** 土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。
- 時期** 土器から時期を判断することは困難である。SD103との切り合い関係から、弥生時代前期後半と考えられる。

SD103（写真図版101）

- 検出状況** 調査区の東隅付近を、調査区に直交して流れる（第156図）。SD102に切られ、SD104・SD105を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は南西から北東である。長さは7.10mが検出された。幅は検出面で70cm～1.00m、溝底で30～40cmを測る。断面は逆台形で、片側に段がある。検出面からの深さは35cmである。溝底の標高は南西端で6.46m、北東端で6.43mで、流れていた方向は南西から北東である。
- 埋没状況** 埋土は4層に分層できる。1・2層は黒褐色シルト質極細砂、3層は黒色砂混じりシル

ト、4層は黒褐色砂混じりシルトである。上の3層は炭・土器を含む。

出土遺物 土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。前期と考えられる胎土中に砂粒を多量に含む小片が多く認められる。

この他、サヌカイトの剥片3.9gが出土している。

時期 土器から判断して弥生時代前期と考えられる。

SD104

検出状況 調査区北東隅に位置し（第156図）、SD103の東側にあたる。SD105を切り、SD103・SK99に切られている。

形状・規模 南東から北西へのびる直線的な溝である。南東側はSK99に、北西側はSD103に切られており、そこで収束している。検出した長さは1.63mである。横断面は逆台形を呈し、検出面における幅は34～38cmを測る。最深部における検出面からの深さは8cmを測る。

埋没状況 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 SD105・SD103・SK99との切り合い関係から、弥生時代前期と考えられる。

SD105

検出状況 調査区北東隅に位置し（第156図）、SD103の東側にあたる。SD103およびSD104に切られている。

形状・規模 北東—南西方向から南西部で南東—北西方向に屈曲する直線的な溝である。北東端は調査区外までのび、北西端はSD103に切られ、途切れている。検出した長さは3.5mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は25～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは9cmである。底部の標高は、両端とも6.74mである。

埋没状況 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 SD103・SD104との切り合い関係から、弥生時代前期と考えられる。

SD106

検出状況 調査区東隅に位置し（第156図）、SD98の北側、SH10の北西側に位置する。SK197を切り、SH10・SK95・SX04に切られている。

形状・規模 北東—南西方向にほぼ直線的にのびる溝である。北東端はSH10に切られ、南西端はSX04に切られ、それぞれ途切れている。検出した長さは6.13mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は25～33cmを測る。最深部における検出面からの深さは15cmである。底部の標高は、北東端で6.73m、南西端で6.68mである。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトおよび黒褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。

第6節 V区の調査

出土遺物	壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。
壺	広口壺の口縁部が出土している。
甕	体部片が出土している。6条のヘラ描沈線紋が描かれている。
他	この他、サヌカイトの剥片2.3gが出土している。
時期	出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD107

検出状況	調査区中央東部に位置する(第156図)。南東部でSD108・SD125と合流しているが、その前後関係は明確ではない。SK127の南側にあたる。
形状・規模	北東-南西方向にわずかに弧を描いてのびる溝で、北東端は調査区外までのび、南西端はSD108・SD125と合流して収束する。検出した長さは2.5mを測る。横断面はU字形をなし、検出面における幅は28~40cmを測る。最深部における検出面からの深さは5cmを測る。底部の標高は、北東端で6.72m、南西端で6.73mである。
埋没状況	黒褐色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。
出土遺物	全く出土していない。
時期	SD108・SD125との関係から、弥生時代前期と考えられる。

SD108

検出状況	調査区中央東部に位置する(第156図)。SK128の北側、SD125の南側にあたる。SD112に切られている。
形状・規模	東西方向にほぼ直線的にのびる溝である。東端はSD112に切られ、西端は調査区内で収束する。検出した長さは1.35mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は20~28cmを測る。最深部における検出面からの深さは6cmを測る。底部の標高は南東端で6.76m、北西端で6.78mである。
埋没状況	黒褐色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。
出土遺物	土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
時期	出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD109

検出状況	調査区東側で検出された(第156図)。SK129に切られ、SD111を切っている。
形状・規模	溝の方向は北東から南西方向で、SD110とはほぼ並行している。長さは5.70mが検出された。幅は検出面で22~26cm、溝底で9~16cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは4cmである。溝底の標高は北東端で6.75m、南西端で6.70mであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。
出土遺物	弥生時代中期の広口壺の口縁部と甕の体部片および蛸壺の一部が出土している。いずれ

も小片のため図化できなかった。

この他、サヌカイトの剥片30.2gが出土している。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

SD110

検出状況 調査区東側で検出された（第156図）。北端はSK129に切られ、SD111を切っている。

形状・規模 溝の方向は北東から南で、SD109とほぼ並行する。長さは5.30mが検出された。幅は検出面で30～41cm、溝底で14～30cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは6cmである。溝底の標高は北東端で6.80m、南端で6.79mであり、北東方向から南方向へ流れていたものと思われる。

出土遺物 遺物は特に出土していない。

時 期 SD111との切り合い関係より、弥生時代前期以降と考えられる。

SD111（図版181・182 写真図版102・169・170）

検出状況 調査区の東隅付近に位置する（第156図）。SK134・SK136・SK138・SD109・SD110・SD112に切られている。SH11に接している。

形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは11.5mが検出された。幅は検出面で1.45～2.08m、溝底で48～54cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは57cmである。溝底の標高は北西端で6.29m、南東端で6.01mで、流れていた方向は北から南である。

埋没状況 埋土は4層に分層でき、1層は黒褐色シルト質極細砂、2層は黄灰色砂混じりシルト、3層は褐灰色シルト、4層は灰褐色細砂混じりシルトである。上の2層は炭を含み、最下層を除き土器を含んでいる。

遺物出土状況 西部の溝底で、数個体の甕の破片がまとまって押しつぶされた状態で出土している。

出土遺物 壺と甕と土製品が出土している。

壺 完存するものはないが、口縁部・頸部・体部・底部の各部位が出土している。

口縁部 2個体分（1345・1346）図化した。いずれも広口壺の口縁部である。

1345は、頸部まで残存するもので、内面はナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。頸部には9条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1346も頸部まで残存する。口縁部内外面および体部内面をナデ調整、頸部以下をハケ調整により仕上げられている。

頸 部 1347の1点である。長頸の広口壺の頸部と考えられる。上から、6条のヘラ先を櫛状に束ねた帯状沈線、2条のヘラ描波状紋、4条のヘラ先を櫛状に束ねた帯状沈線、2条のヘラ描波状紋、4～5条のヘラ先を櫛状に束ねた帯状沈線の順に施文されている。また、上部の6条の沈線の上側にも1条のヘラ描沈線紋が認められる。上側を欠損しているため全容は明らかにできないが、本来は数条からなるものと考えられる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

体 部 体部中位の小片（1348）、口縁部と底部を欠くもの（1350）、底部から体部中位まで残存

第6節 V区の調査

するもの(1351)が出土している。

1348は小片のため径を復元することはできなかった。内面はハケ調整により、外面はナデ調整により仕上げられている。4条の刻み目突帯が貼り付けられている。刻み目は等間隔に施されているのではなく、部分的に施されていない箇所も認められる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1350は内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部に6条の、体部中位に2条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1351は、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。

底部 1349を図化したが、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

甕 ほぼ完存する1364、完形に復元できる1363を含め、口縁部片(1352~1362)・底部片(1365・1366)を図化している。

1352・1354は、それぞれ内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には1352では3条の、1354では7条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1353・1356・1357は内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部には1353・1356では3条の、1357では5条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1355は口縁部を欠くが、頸部の特徴から逆L字形をなすものと考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部以下には7条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1358・1360はともに内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施されている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1359・1362は、内外面をナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1363・1364はともに内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。口縁部は如意形をなすが、他の如意形の口縁部片とは異なり、口縁部が短い。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

底部の1365は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。これに対して、1366は内外面をナデ調整により仕上げられている。

土製品 土製円板(1367)が出土している。ほぼ完存するもので、周囲は打ち欠かれて整形されている。3.50cm×3.60cmとほぼ円形をなし、その厚みは1.2cmを測る。当該期の土器の壺の一部を転用したのと考えられ、胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

その他 サヌカイトの剥片(2.4g)、珪化木(84.9g)が出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD112

検出状況 調査区中央東部に位置し(第156図)、SK130の北西側、SK136の東側にあたる。SD111・SD108・SH11を切っている。

- 形状・規模** 北東から南へ弧状にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。検出した長さは8.45mである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は30～48cmを測る。最深部における検出面からの深さは14cmを測る。
- 埋没状況** 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。埋土中には炭片や黄褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 須恵器の坏と土師器の坏の口縁部片が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

SD113 (図版183 写真図版103・170・171・191)

- 検出状況** 調査区の東半に位置する(第156図)。SK136・SK139・SK142に切られ、SH11やSD118を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向はほぼ西から東である。長さは10.15mが検出された。幅は検出面で42～80cm、溝底で15～65cmを測る。断面はU字形で、検出面からの深さは46cmである。溝底の標高は西端で6.82m、東端で6.46mで、流れていた方向は西から東である。
- 埋没状況** 4層に分層でき、1・2層は褐灰色シルト質極細砂、3層は灰黄褐色シルト質極細砂、4層は褐灰色シルト質極細砂である。
- 遺物出土状況** SD111同様、溝底で数個体の甕の破片が押しつぶされた状態で出土している。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器**
- 壺** 口縁部片(1368・1370)と体部片(1369)が出土している。
- 1368・1370はともに広口壺の口縁部で、内外面ともナデ調整により仕上げられている。1370は口縁端部に1条のヘラ描沈線紋を描き、その後刻み目を施している。また口縁部内面には3条の刻み目突帯が貼り付けられている。両個体とも胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1369は体部の一部であるが、小片のためその具体的な部位は明らかにできない。また径も復元できない。上から、ヘラ先を楯状にした6条の直線紋、3条の波状紋、4条の直線紋が描かれている。4条の直線紋については、下側を欠くため、上側の直線紋同様6条の可能性も考えられる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 甕** 完存するものあるいは完形に復元できるものはなく、口縁部片(1372～1376)あるいは底部片(1371・1377)が出土している。
- 1372は内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1373は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。頸部以下には4条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1374は内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には6条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 1375は内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部直下には1条のヘラ描沈線紋

第6節 V区の調査

が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1376も内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施されている。頸部直下には上から7条のヘラ描沈線紋、1列の円形刺突紋帯、5条のヘラ描沈線紋が認められる。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1377の底部片は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

鉢 小型鉢の下半部(1378)と大型鉢の口縁部～体部(1379)が出土している。

1378は内外面とも指オサエとナデ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1379は口径39.9cmを測る。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には7mm以下の砂粒が多量に含まれている。

石器 S93は砥石である。全体の形状は典型的な台形である。全面研磨を行っている。石材は流紋岩質凝灰岩である。長さ10.15cm、幅5.05cm、厚さ2.5cm、重さは129.8gである。

ほかに重さ5.9gのサヌカイトの剥片が出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD114 (図版184・185 写真図版103・171・172)

検出状況 調査区中央部に位置し(第156図)、SH12の南東側、SK150～SK152の南側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 ほぼ東西方向に直線的にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。検出した長さは5.90mである。横断面は逆台形を呈し、検出面における幅は35～60cmを測る。最深部における検出面からの深さは16cmを測る。

埋没状況 灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に炭片や黄褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 壺・甕・鉢の各器種が出土している。

壺 体部片(1380・1381)と底部片(1382)が出土している。

1380は肩部の小片である。内外面共ナデ調整により仕上げられている。上部に1条の指頭圧痕紋突帯が貼り付けられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1381は小型壺の体部中位の小片である。内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。外面はハケ調整後部分的にヘラ磨きにより仕上げられている。その後、2条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1382は、内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。

甕 完形に復元できる1385・1389の他、口縁部片(1383・1384・1386～1388・1390)、体部片(1391)、底部片(1392)が出土している。

1383は口径50.1cmを測る大型の甕である。口縁部は形態的には如意形をなすが、その成形法からみて、逆L字形に分類されるものと考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1384は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。

1385は内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部には1条のヘラ描沈線紋が描

かれている。

1386は、口縁部内外面はナデ調整により仕上げられているが、体部については磨滅のため十分観察できない。口縁端部には刻み目が施され、頸部には3条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1387は口縁部内外面をナデ調整により、体部内外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には6条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1388は、口縁部内外面および体部内面をナデ調整、体部外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には8条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1389は内外面をナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には8条のヘラ描沈線紋が描かれている。また、底部中央には径1.7cmの穿孔が認められる。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1390は口径13.8cmと小型の甕である。口縁部内外面および体部外面はナデ調整、体部内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。頸部以下には3～4条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1391は体部上半の小片である。このため、径を復元することはできなかった。内外面をナデ調整により仕上げられている。頸部以下には2条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1392は底部から体部下半まで残存する個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。体部中央には径1.3cmの穿孔が認められる。胎土中には6mm以下の砂粒が多量に含まれている。

鉢 1393の1個体である。口径44cmを測る大型品である。内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。頸部直下には3.8cm×1cmの把手が貼り付けられている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD115

検出状況 調査区中央付近で検出され（第156図）、北西—南東方向に平行する3条の溝のなかで一番北東側の溝である。SK158を切っている。

形状・規模 溝の方向は北西から南東方向である。長さは5.40mが検出された。幅は検出面で20～30cm、溝底で5～16cmを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは6cmである。溝底の標高は北西端で5.40m、南東端で6.70mであり、北西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 埋土は暗灰色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 弥生時代前期の甕の底部と体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

第6節 V区の調査

SD116

- 検出状況** 調査区中央に位置し（第156図）、SD115の南西側、SD117の北東側、SH13の南東側にあたる。SK187・SK190・SD118・SH13を切っている。
- 形状・規模** 南東から北西へ直線的にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。検出した長さは5.82mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は28～33cmを測る。最深部における検出面からの深さは23cmを測る。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 須恵器の蓋と土師器の甕が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

SD117

- 検出状況** 調査区中央に位置し（第156図）、SD116の南西側、SD98の北東側、SH13の南東側、SK187の西側にあたる。SK187に切られている。
- 形状・規模** 南東から北西へ直線的にのびる溝である。北西端は調査区内で収束しているが、南東端はSK187に切られている。検出した長さは2.75mである。横断面はV字形をなし、検出面における幅は20～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは25cmを測る。底部の標高は、南東端で6.79m、北西端で6.60mを測る。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に炭片・土器片を含み、灰褐色シルトがブロック状に含まれていることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 須恵器の小片が出土している。奈良時代の壺の体部片と考えられる。
- 時期** 出土土器から判断して、奈良時代以降と考えられる。

SD118（図版185 写真図版172）

- 検出状況** 調査区中央に位置し（第156図）、SK187の北東側、SK158の北側にあたる。SK158・SD191・SD116に切られている。
- 形状・規模** ほぼ南北方向にわずかに弧を描いてのびる溝である。北端はSK158に切れ、南端は溝状の落ち込みに切られている。検出した長さは5.18mである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は1.10m～1.38mを測る。最深部における検出面からの深さは55cmを測る。底部の標高は、北端で6.78m、南端で6.22mである。
- 埋没状況** 2層からなり、下から灰黄褐色シルト質極細砂、にぶい黄褐色シルト質極細砂の順に堆積している。上層には炭片を含み、両層とも黄褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺・甕・蓋の各器種が出土している。
- 壺** 口縁部片・頸部片・体部片・底部片が出土している。
- 口縁部** 広口壺の口縁部であるが、小片のため図化できなかった。内面に指頭圧痕紋突帯が貼り付けられている。
- 頸部** 当片についても小片のため図化できなかった。5条のヘラ描沈線紋が描かれている。
- 体部** 1394・1395の2片を図化した。1394は内外面ともナデ調整により仕上げられ、5条の楯

描直線紋が2帯描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。1395は、肩部の小片で、径は復元できなかった。1条の刻み目突帯が貼り付けられている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

- 底部** 1396～1398の3個体図化した。1396は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。1397は内外面ともナデ調整により仕上げられている。1398は磨滅のため調整は観察できない。
- 壺** 口縁部片と底部片が出土している。
- 口縁部** 図化できたのは1401の1個体である。頸部に8条のヘラ描沈線が描かれている。
- 底部** 1399の1個体を図化した。内外面をナデ調整により仕上げられている。
- 蓋** 完形に復元できる1400の1個体である。口縁部内外面をナデ調整、体部外面をハケ調整後ナデ調整、つまみ外面を指オサエ後ハケ調整により、それぞれ仕上げられている。口縁部内面の端部から約2cmの範囲に帯状に煤の付着が認められる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

SD119 (図版186 写真図版191)

- 検出状況** 調査区中央北部に位置し(第156図)、SH12とSH14の間、SK168の南側、SK171の東側にあたる。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** ほぼ東西方向にのびる溝であるが、幅は一定しておらず、西側ほど狭くなっている。また一部二股状に分岐している箇所も認められる。東端はSH12と切り合う箇所、西端は調査区内で収束している。検出した長さは5.32mである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は1.20m～46cmを測る。最深部における検出面からの深さは23cmを測る。底部の標高は、東端で6.68m、西端で6.62mを測る。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトがブロック状に含まれていることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 1402・1403は須恵器である。1402は推定口径18.3cm、残存高5.9cmと口径に対し器高が深く、坏というより椀の可能性もある。器壁は薄く、わずかに屈曲している。1403は坏Aの底部で、内面に「X」のヘラ記号がある。底部外面はヘラ切り後ナデている。
- 石器** S94は有溝石錘である。全体の形状は卵形をしている。長軸方向を全周して断面U字形の溝が擦り切っている。石材は安山岩溶岩である。長さ5.52cm、幅4.15cm、厚さ3.8cm、重さ98.7gである。
- 時期** 出土遺物から、奈良時代と考えられる。

SD120 (図版186)

- 検出状況** 調査区中央西部に位置し(第156図)、SH13とSH14と平面的に一致する。SK168の南側、SK172の北側にあたる。SH13・SH14を切り、SD121に切られている。
- 形状・規模** ほぼ東西方向にのび、緩やかに蛇行する。両端とも調査区内で収束する。検出した長さ

第6節 V区の調査

は14.5mである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅22～34cmを測る。最深部における検出面からの深さ6cmを測る。底部の標高は、東端で6.72m、西端で6.73mを測る。

埋没状況 黒褐色極細砂1層からなる。埋土中に褐灰色砂質シルトがブロック状に含まれていることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 1404は須恵器の坏Bの底部である。底部外面はヘラ切り後ナデしており、圧痕がある。

時期 出土遺物から、奈良時代と考えられる。

SD121 (図版186 写真図版172)

検出状況 調査区中央西部に位置し(第156図)、SH14とSH15とSK175・SK176を切っている。SH14・SH15・SD120を切り、SD98に切られている。

形状・規模 ほぼ南北方向にのびる溝であるが、緩やかに蛇行している。北端は調査区外までのび、南端はSD98に切られている。検出した長さは20.3mである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は14cm～37cmを測る。最深部における検出面からの深さは12cmを測る。底部の標高は、北端で6.78m、南端で6.67mを測る。

埋没状況 褐灰色極細砂1層からなる。埋土中に黄褐色シルトがブロック状に含まれていることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土師器の坏Aとカマドが出土している。

坏 A 1405は土師器の坏Aである。推定口径8.9cm、残存高2.85cmと小型でやや深めの碗に近い器形である。磨滅のため、調整は不明であるが、口縁端部付近はヨコナデをしており、端部は薄く仕上げられている。色調はにぶい橙色である。

カマド 1406・1407はカマドの一部である。1406は焚口の上の庇の部分であり、庇の下面は薄くススけている。一部にハケメが残るが、ユビオサエヤナデなどが調整の主体である。1407は甕や鍋をのせる掛け口付近の破片で、庇が剝離したような痕跡がみられる。端面は器壁にほぼ垂直にカットされている。磨滅のため調整は不明である。

時期 出土遺物から、奈良時代と考えられる。

SD122

検出状況 調査区南東部に位置し(第156図)、SD98の南側にあたる。SD98と切り合い関係にあり、SD98に切られている。

形状・規模 北西-南東方向にほぼ直線的にのびる溝である。北西端はSD98に切られ、南東端は調査区外までのびている。検出した長さは1.50mである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は50cm～53cmを測る。最深部における検出面からの深さは10cmを測る。底部の標高は、北西端で6.81m、南東端で6.71mを測る。

埋没状況 褐灰色極細砂1層からなる。

出土遺物 弥生時代中期の高坏の円板充填部が出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

SD123

- 検出状況** 調査区中央東部に位置し（第156図）、SD108の西側、SD124の北東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** ほぼ南北方向に直線的にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。検出した長さは1.05mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は27～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは13cmを測る。底部の標高は、北端で6.68m、南端で6.76mを測る。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。土器片を含み、黄褐色シルトがブロック状に混入していることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 土器の小片が出土している。胎土中に砂粒を多量に含み、弥生時代前期の特徴を示している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD124（図版186）

- 検出状況** 調査区中央東部に位置し（第156図）、SD123の北東側、SD112の北西側、SD111の北東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 北西－南東方向に直線的にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。検出した長さは1.85mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は40cm～50cmを測る。最深部における検出面からの深さは20cmを測る。底部の標高は、両端とも6.76mを測る。
- 埋没状況** 3層からなり、下から黒褐色シルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。各層に炭片が含まれ、黄褐色シルトがブロック状に混入していることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 弥生時代中期の特徴を示す甕（1408）が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

SD125

- 検出状況** 調査区中央東部に位置し（第156図）、SD108の北東側、SD107の西側にあたる。南東部でSD108・SD107と合流しているが、これらの遺構との切り合い関係は調査時には明確にできなかった。
- 形状・規模** ほぼ北西－南東方向に直線的にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。検出した長さは3.65mである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は14cm～43cmを測る。最深部における検出面からの深さは7cmを測る。底部の標高は、北西端で6.68m、南東端で6.75mを測る。
- 埋没状況** 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 弥生時代前期の土器の小片が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

6. 第3面の調査

(1) 概要 (図版187 写真図版104・105)

検出した遺構は、柱穴と土坑に限られる。前項の第2面とは大きく異なり、遺構の数も極端に少ない。このなかで、当調査区のほぼ中央部に遺構の集中がみられ、東隅へとその分布が広がっている。

柱 穴 約110穴検出したが、建物を復元することはできなかった。いずれの柱穴も径約15cmと小型で、掘り方の平面形も円形に限られる。また、柱痕を確認できた柱穴も認められない。このなかで、P 30から比較的良好な遺物の出土が認められた。

土 坑 約25基 (SK201～SK22) 検出した。当遺構面における遺構分布の全体的傾向と同じく、調査区中央部から東側にかけて多く分布する。どの土坑も検出面から浅く、遺物の出土量も全体的に少ない。

他 以上の他に、溝状の遺構も検出している。ただし、検出面からの深さが極めて浅く、遺物が全く出土していないこと等の理由から、溝状遺構との断定は困難である。



第158図 V区第3面

(2) 調査の概要

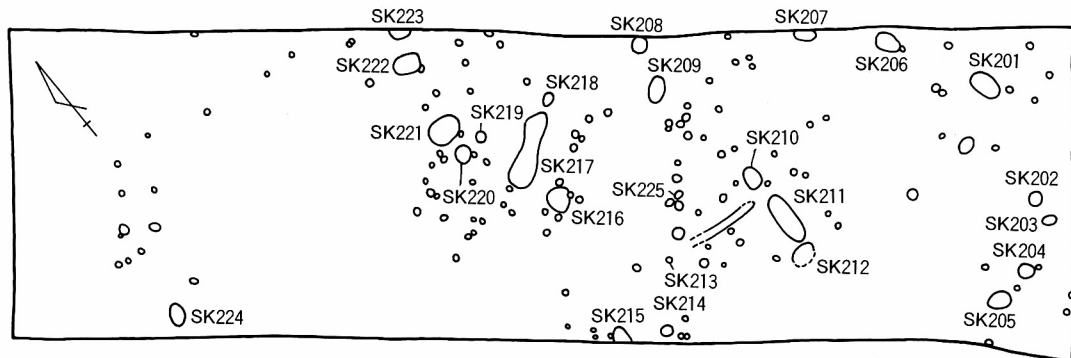
I. 柱 穴

P 3 0 (図版150 写真図版188)

出土遺物 S 81はサヌカイト製の凹基式石鏃である。基部が一部欠けている。長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.45cm、重さは1.9gと大型で厚めの鏃である。

時 期 第3面で検出していることから、弥生時代前期と考えられる。

II. 土 坑



第159図 V区第3面 土坑

SK 2 0 1 (図版188 写真図版173)

検出状況 調査区東隅付近に位置している (第159図)。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で1.96m、短軸方向1.37mを測る。横断面はU字形で、最深部における検出面からの深さは30cmを測る。長軸はN70°Eを指向する。

埋没状況 埋土は3層に分層できる。上層は灰黄褐色シルト質極細砂で、中層は黒褐色シルト質極細砂混じりシルトである。下層は褐灰色極細砂混じりシルト質極細砂である。

出土遺物 壺・甕・土錘他が出土している。

壺

広口壺の口縁部 (1409) と体部 (1410・1411) が出土している。

1409は口縁部の小片で、内外面をナデ調整により仕上げられている。端部には1条のヘラ描沈線紋と刻み目が施されている。両者の前後関係は明確にできない。内面には3条の突帯が貼り付けられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1410は肩部から下半部まで残存する体部片である。内外面をナデ調整により仕上げられている。体部中位最大径部に4条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1411は体部上半を中心とする破片である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。最大径部には5条の突帯が貼り付けられている。突帯の下端以下が欠けているため、より多くの突帯が貼り付けられていた可能性も考えられる。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕

逆L字形をなす口縁部が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土 錘

完存する1個体 (1412) が出土している。平面形は6.4cm×4.5cmの楕円形を呈する。厚さは3.4cmである。長軸方向に1周するように幅5mm前後の溝が彫られている。そして、

第6節 V区の調査

土錘のほぼ中央部のこの溝とほぼ重なる位置に径1.2cmの紐穴が穿孔されている。ただし、この紐穴は平面的に裏表が一致するものではなく、土錘の横断面に対して斜方向に穿たれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

他 サヌカイトの剥片が5.2g出土している。
時 期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK202

検出状況 SK203の北側に位置し（第159図）、完存する。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で87cm、その直角方向で65cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは5cmを測る。長軸はN45°Wを指向する。底部での規模は長軸方向で75cm、短軸方向で52cmを測る。

埋没状況 褐灰色極細砂1層からなる。

出土遺物 遺物は特に出土していない。

時 期 遺物は出土していないが、第3面で検出していることから弥生時代前期と考えられる。

SK203

検出状況 SK202の南側に位置し（第159図）、完存する。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で84cm、その直角方向で52cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは5cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で70cm、その直角方向で40cmを測る。

埋没状況 褐灰色極細砂1層からなる。

出土遺物 特に遺物は出土していない。

時 期 遺物は出土していないが、第3面で検出していることから弥生時代前期と考えられる。

SK204

検出状況 SK205の東側に位置し（第159図）、完存する。東西両側に柱穴が検出されているが、その関係は不明である。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は円形で、長軸方向で90cm、その直角方向で80cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは9cmを測る。長軸はN30°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で73cm、その直角方向で65cmを測る。

埋没状況 褐灰色シルト～シルト質極細砂1層からなる。土器・炭を若干含む。

出土遺物 胎土が弥生時代前期の特徴を示す甕の体部片が出土しているが、図化できなかった。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK205

- 検出状況** SK204の西側に位置し（第159図）、その間に柱穴を挟んでいる。完存して検出された。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.40m、その直交方向で1.05mを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは28cmを測る。長軸はN20°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で88cm、その直交方向で75cmを測る。
- 埋没状況** 上層に褐色極細砂混じりシルト質極細砂、下層に褐灰色極細砂～シルト質極細砂が堆積しており、下層はしまりが悪く、粘性がない。レンズ状に堆積しており、徐々に堆積したものである。
- 出土遺物** 特に遺物は出土していない。
- 時期** 遺物は出土していないが、第3面で検出していることから弥生時代前期と考えられる。

SK206

- 検出状況** 調査区東隅付近に位置し（第159図）、柱穴と接している。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.67m、短軸方向で1.05mを測る。横断面はU字形で、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。
- 埋没状況** 埋土は2層に分層できる。上層は灰色極細砂で灰オリーブ色細砂のブロックを含んでいる。下層はオリーブ褐色の細砂である。
- 出土遺物** 土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。弥生時代前期の胎土的特徴を示すものである。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK207

- 検出状況** SK206の北西側に位置する（第159図）。西側には柱穴群が検出されている。北側の一部が削平されている以外はほぼ完存する。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は長方形で、長軸方向で1.23m、その直交方向で60cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。長軸はN45°Eを指向する。底部での規模は長軸方向で1.03m、その直交方向で40cmを測る。
- 埋没状況** 上層に灰色シルト質極細砂、下層に明黄褐色シルト質極細砂混じり極細砂が堆積していた。上層からは土器の小片が出土している。
- 出土遺物** 弥生時代前期の特徴を示す壺の頸部が出土している。小片のため図化できなかった。1条の貼付突帯が認められる。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK208

- 検出状況** 調査区中央北東隅に位置する（第159図）。SK209の北側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形をなし、長軸方向で1.02m、短軸方向で87cmを測る。横断面は深い皿形

第6節 V区の調査

をなし、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。

埋土 2層からなり、下からにぶい黄褐色シルト質極細砂、灰黄褐色シルト質極細砂の順に堆積している。黄褐色極細砂質シルトがブロック状に含まれ、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。ただし、胎土は弥生時代前期の特徴を示している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK209

検出状況 調査区中央北東隅に位置する（第159図）。SK208の南側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形をなし、長軸方向で1.54m、短軸方向で85cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。

埋土 灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。第3面で検出されていることから判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK210

検出状況 SK211の北側に位置する（第159図）。柱穴により北東側の一部が切られている以外は完存する。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、長軸方向で1.40m、その直交方向で98cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。長軸は真北を指向する。底部での規模は長軸方向で1.25m、その直交方向で88cmを測る。

埋没状況 上層に褐灰色シルト質極細砂、下層に灰黄褐色シルト質極細砂が堆積していた。下層には若干のマンガンが認められた。レンズ状に堆積しており、徐々に埋まったものと思われる。

出土遺物 特に遺物は出土していない。

時期 第3面で検出されていることから弥生時代前期と考えられる。

SK211

検出状況 SK210とSK212の間に位置し（第159図）、完存する。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で3.50m、その直交方向で70cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。長軸は真北を指向する。底部での規模は長軸方向で3.22m、その直交方向で82cmを測る。

埋没状況 灰黄褐色シルト質極細砂の1層からなる。

出土遺物 特に遺物は出土していない。

時期 第3面で検出されていることから弥生時代前期と考えられる。

SK212

- 検出状況** SK211の南側に位置する（第159図）。南側の半分は削平されており、遺存状況は悪い。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は半円形で、現状での規模は長軸方向で1.45m、その直交方向で1.15mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは11cmを測る。長軸はN75°Wを指向する。底部での規模は長軸方向で1.45m、その直交方向で1.00mを測る。
- 埋没状況** 上層に灰色極細砂～シルト質極細砂、下層に褐色極細砂混じりシルト質極細砂が堆積していた。上層からは土器の小片が出土している。
- 出土遺物** 土器の小片が出土しているが、器種など特定できるものはない。
- 時期** 出土遺物などから判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK213

- 検出状況** SK225の南西側に位置し（第159図）、完存する。周辺には柱穴・土坑が散在しているが、特に北側には列状に土坑が並んでおり、本土坑はその一番南端にあたる。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形で、長軸方向で65cm、その直交方向で63cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。長軸は真北を指向する。底部での規模は長軸方向で48cm、その直交方向で45cmを測る。
- 埋没状況** 上層に灰色極細砂～シルト質極細砂、下層に灰色シルト質極細砂が堆積している。上層と下層の両方から土器が数片出土している。下層はラミナ状に堆積しており、徐々に堆積したものと思われる。
- 出土遺物** 弥生時代前期の胎土的特徴を示す壺の体部が数片出土している。小片のため図化できなかった。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK214

- 検出状況** 調査区中央南東隅に位置する（第159図）。SK215の東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形をなし、その径は60cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは9cmを測る。
- 埋土** 灰褐色極細砂質シルト1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。第3面で検出されていることから判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK215

- 検出状況** 調査区中央南東隅に位置する（第159図）。SK214の西側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められないが、調査区外まで広がるため、検出できたのは全体の約1/2に限

第6節 V区の調査

られる。

形状・規模 平面形は楕円形もしくは溝状をなすものと考えられる。長軸方向で1.05m、短軸方向で84cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。

埋土 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。黄褐色シルトをブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 器種不明の小片が出土している。弥生時代前期の胎土的特徴を示している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK216 (図版188 写真図版173)

検出状況 調査区中央に位置する(第159図)。SK217の南側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形はやや歪んではいるが楕円形をなし、長軸方向で1.55m、短軸方向で1.40mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは34cmを測る。

埋土 5層からなる。下から、にぶい黄褐色シルト質極細砂、灰黄褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂、灰黄褐色シルト質極細砂、灰黄褐色シルト質極細砂の順に堆積している。下の2層が一旦埋められた後再び掘りなおされ、その後上の3層が堆積している。上の3層についても、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 壺・甕・鉢の各器種が出土している。

壺 直口壺の口頸部(1413)が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部は断面方形をなし、その両角を斜上方につまみ出すように指オサエを施し、その中間が凹線状になっている。そして、つまみ出された箇所刻みに目か施されている。また、頸部には3条を1単位としたヘラ描沈線紋が2単位描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕 口縁部(1414・1415)と底部(1416)が出土している。

1414は内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頸部以下には4条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1415は口径14.6cmと小型の甕である。内外面をナデ調整により仕上げられている。頸部以下には、上から8条のヘラ描沈線紋、2条のヘラ描波状紋、4条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1416は内面をナデ調整により仕上げられている。外面についてはわずかにハケ調整の痕跡が観察できる。底部中央部に径1.6cmの穿孔が施されている。

鉢 口縁部を欠く小型鉢1個体(1417)が出土している。内面はナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。体部下半に、上から4条のヘラ描沈線紋、1列の円形刺突紋、3条のヘラ描沈線紋が施され、さらに体部と脚部の接合部に4条のヘラ描沈線紋が描かれている。また、脚部中位に径4mmの紐穴が対になる位置に2箇所穿たれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK217 (図版188)

- 検出状況** 調査区中央に位置する (第159図)。SK216の北側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は溝状を呈する。長軸方向で5.80m、短軸方向で1.60mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。
- 埋土** 2層からなり、下から灰黄褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂の順に堆積している。上層には炭片を含み、黄褐色シルトがブロック状に堆積していることから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 壺と甕が出土している。
- 壺** 口縁部片・頸部片・体部片が出土しているが、図化できたのは1418の口縁部片のみである。
- 1418は内面をナデ調整により仕上げられている。外面についてはハケ調整の痕跡がわずかに観察できる。口縁端部には1条のヘラ描沈線紋を施した後、刻み目を施している。また頸部には2条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。
- この他、9条+ α のヘラ描沈線紋が描かれた頸部片、突帯が貼り付けられた体部片が出土している。
- 甕** 口縁部片が出土している。図化できたのは1419の1個体のみである。内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。
- この他、図化できなかった口縁部片のなかに、逆L字形をなし、頸部以下に2条+ α のヘラ描沈線紋が描かれた個体も出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK218

- 検出状況** 調査区中央に位置する (第159図)。SK217の北東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形を呈する。長軸方向で70cm、短軸方向で50cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは9cmを測る。
- 埋土** 暗灰色シルト質極細砂1層からなる。黄褐色シルトがブロック状に含まれ、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。第3面で検出されていることから判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK219

- 検出状況** 調査区中央北部に位置する (第159図)。SK217の北側、SK220の東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形はほぼ円形を呈する。その規模は62cm×58cmを測る。横断面は緩やかなU字形を

第6節 V区の調査

なし、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。

埋土 2層からなり、下から灰黄褐色極細砂、黄灰色シルト混じり極細砂～細砂の順に堆積している。埋土の特徴から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。第3面で検出されていることから判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK220 (写真図版105)

検出状況 調査区中央北部に位置する(第159図)。SK219の西側、SK221の南側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形はほぼ円形を呈する。その規模は1.05m×98cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmを測る。

埋土 2層からなり、下から灰黄褐色シルト混じりシルト質極細砂、灰黄褐色シルト質極細砂まじり極細砂の順に堆積している。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。第3面で検出されていることから判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK221 (写真図版105)

検出状況 調査区中央北部に位置する(第159図)。SK220の北側、SK222の南側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形を呈する。長軸方向で2.07m、短軸方向で1.53mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは26cmを測る。

埋土 2層からなり、下から黒褐色極細砂～シルト質極細砂、暗黄褐色シルト～シルト質極細砂の順に堆積している。黄褐色シルトがブロック状に含まれ、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。第3面で検出されていることから判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK222 (写真図版105)

検出状況 調査区中央北隅に位置する(第159図)。SK221の北側、SK223の南西側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は長方形気味の楕円形を呈する。長軸方向で1.70m、短軸方向で1.25mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmを測る。

埋土 2層からなり、灰褐色シルト質極細砂、黄褐色シルト質極細砂の順に堆積している。

出土遺物 器種の特定できない土器片が出土している。胎土は弥生時代前期の特徴を示している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK223

- 検出状況** 調査区中央北隅に位置する（第159図）。SK222の北東側にあたる。当遺構は調査区外まで広がっており、検出できたのは全体の約1/2である。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で1.30m検出し、短軸方向で63cmを測る。横断面は逆台形を呈するものと考えられ、検出した範囲での最深部における検出面からの深さは18cmを測る。
- 埋土** にぶい黄褐色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。胎土は弥生時代前期の特徴を示している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK224

- 検出状況** 周辺に柱穴、土坑が検出されている（第159図）。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は長方形で、長軸方向で1.33m、その直交方向で78cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは28cmを測る。長軸はN65°Wを指向する。底部での規模は長軸方向で99cm、その直交方向で45cmを測る。
- 埋没状況** 上層に褐色極細砂～シルト質極細砂、下層に褐灰色シルト～シルト質極細砂が堆積している。レンズ状に堆積しており、徐々に埋まったものと思われる。
- 出土遺物** 遺物は特に出土していない。
- 時期** 遺物は出土していないが、第3面で検出されたことから、弥生時代前期と考えられる。

SK225

- 検出状況** 調査区中央部東寄りに位置している（第159図）。周辺にはほぼ同規模の土坑が集中している。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で57cm、短軸方向で38cmを測る。横断面はU字形で、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。長軸はN45°Wを指向する。
- 埋没状況** 埋土は2層に分層できる。上層は黄灰色極細砂で細礫を含んでいる。下層は褐灰色極細砂である。
- 出土遺物** 弥生時代前期の胎土的特徴を示す土器の小片が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

7. 第4面の調査

(1) 概要 (図版189 写真図版106)

当遺構面では調査区のほぼ全域にわたって水田跡を検出している。I区～IV区の第4面で検出した水田跡と一帯となるものである。

(2) 調査の結果

水田跡 (図版189 写真図版107・108)

検出状況 調査区のほぼ全域で検出されているが、一部西隅においては、第1面で検出した近世の水田跡に削平されている。計238区画検出し、その面積は約1,500㎡に及ぶ。

畦 畔 I区～IV区第4面検出の水田跡と同様、すべて同規模の畦畔からなる。断面形は蒲鉾形をなし、基底部における幅20cm、水田面との比高5cmを測る。

平面形 I区～IV区同様、すべて小区画水田からなる。IV区とは異なり、一部を除いて畦畔がほぼ直交しており、平面形は方形ないし長方形を呈する。

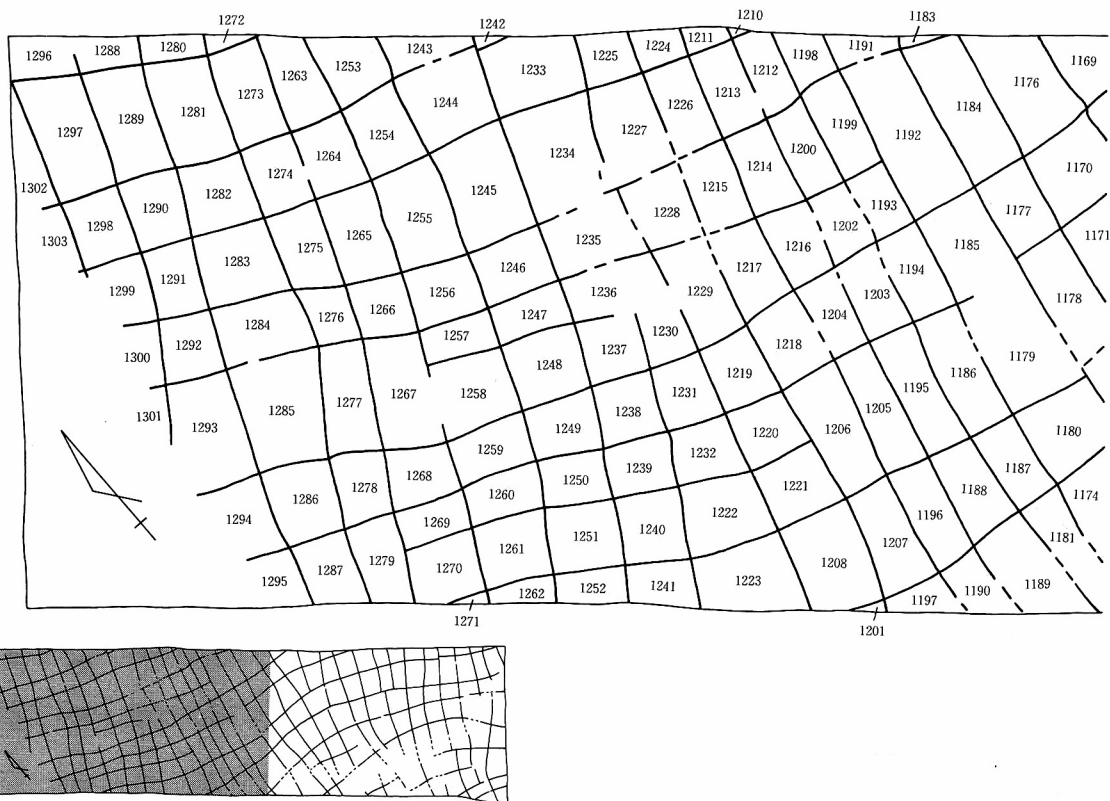
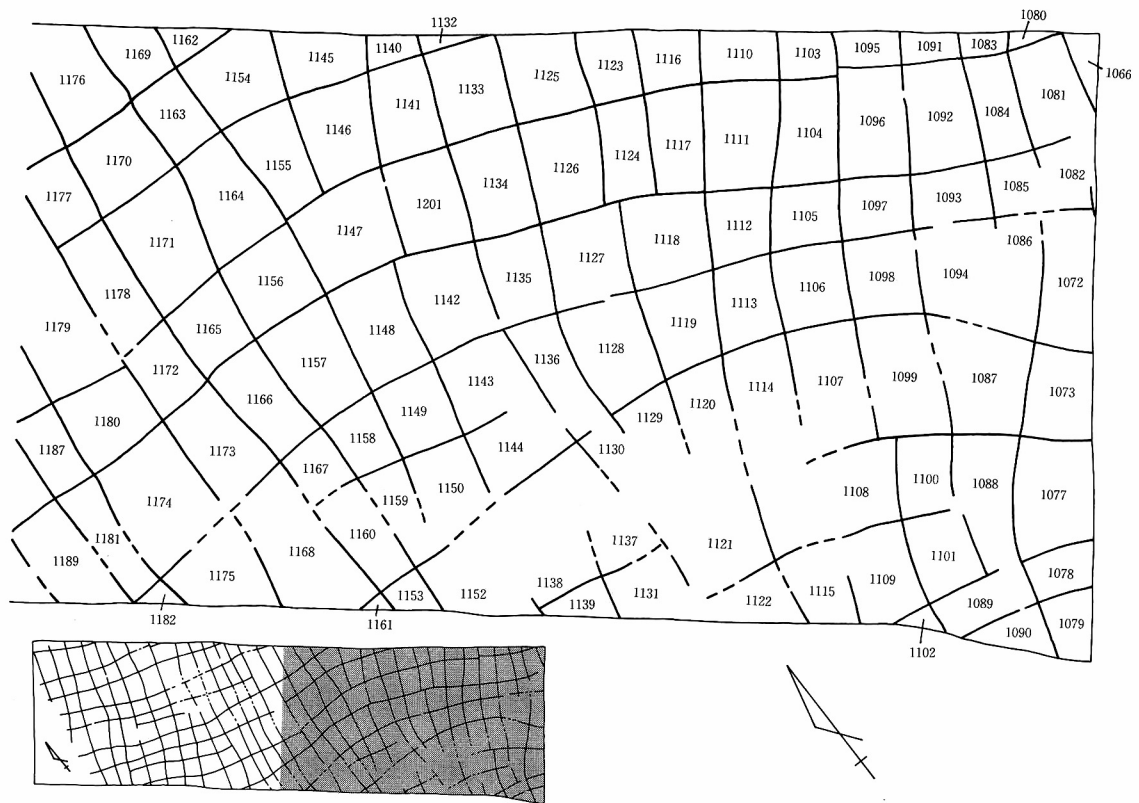
面 積 各区画の面積は一定ではなく、狭いもので1.7㎡、広いもので10.3㎡とバリエーションが認められる。ただし、一部調査区外まで広がる区画のなかには11㎡を越えるものも認められる。平均で4.60㎡である。

標 高 水田面の標高は、IV区で認められた北西方向への傾斜が当地区中央部でピークに達し、より北西側は逆に低くなる傾向にある。その標高は、最も高い水田面で6.32m、最も低い水田面で5.73mと、59cmもの比高差が認められる。

各水田面の標高・面積については第17表～第19表を参照されたい。



第160図 V区第4面



第161図 V区第4面 水田跡

第17表 V区第4面 水田跡一覧表(1)

()内は検出面積

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
1066	5.91	(1.5)	1109	5.76	5.7	1145	5.86	(4.5)
1072	5.89	(7.7)	1110	5.88	(3.7)	1146	5.84	5.8
1073	5.80	(5.8)	1111	5.89	7.4	1147	5.85	7.7
1077	5.77	(8.6)	1112	5.85	4.0	1148	5.85	6.4
1078	5.77	(2.2)	1113	5.83	4.3	1149	5.86	4.5
1079	5.73	(2.7)	1114	5.83	3.6	1150	5.87	3.0
1080	5.90		1115	5.77	(4.0)	1152	5.94	(4.3)
1081	5.90	6.1	1116	5.88	(3.2)	1153	6.01	(1.3)
1082	5.90	2.5	1117	5.88	4.8	1154	5.88	(6.0)
1083	5.88	(0.9)	1118	5.83	6.3	1155	5.88	5.1
1084	5.89	3.9	1119	5.83	5.5	1156	5.90	5.3
1085	5.88	2.5	1120	5.82	2.6	1157	5.95	6.9
1086	5.84	4.6	1121	5.75	5.3	1158	5.94	3.0
1087	5.81	8.8	1122	5.76	(4.0)	1159	5.93	0.9
1088	5.80	6.4	1123	5.89	(3.3)	1160	6.00	4.3
1089	5.77	3.3	1124	5.86	3.7	1161	6.03	
1090	5.74	(2.0)	1125	5.87	(6.0)	1162	5.91	(1.1)
1091	5.88	(1.4)	1126	5.83	6.3	1163	5.91	3.6
1092	5.87	6.8	1127	5.78	6.1	1164	5.90	6.7
1093	5.86	4.0	1128	5.79	6.8	1165	5.97	3.8
1094	5.90	7.9	1129	5.82	(2.6)	1166	5.98	5.0
1095	5.88	(2.1)	1130	5.76	(1.0)	1167	5.97	2.5
1096	5.86	6.5	1131	5.78	(4.5)	1168	6.03	(11.2)
1097	5.84	3.4	1132	5.87		1169	5.93	(3.4)
1098	5.83	4.9	1133	5.86	6.4	1170	5.98	5.5
1099	5.82	8.4	1134	5.79	6.1	1171	5.98	8.4
1100	5.79	3.8	1135	5.77	5.1	1172	6.02	3.3
1101	5.78	4.2	1136	5.77	4.9	1173	6.03	5.6
1102	5.76	(0.4)	1137	5.78	(2.1)	1174	6.04	10.3
1103	5.88	(2.3)	1138	5.85	(1.0)	1175	6.09	6.1
1104	5.88	5.4	1139	5.84	(1.5)	1176	5.96	(7.6)
1105	5.84	3.5	1140	5.83	(1.0)	1177	6.03	3.7
1106	5.83	4.8	1141	5.83	5.3	1178	6.04	5.5
1107	5.83	7.7	1142	5.83	7.8	1179	6.05	8.4
1108	5.76	10.0	1143	5.81	5.8	1180	6.04	5.7

第18表 V区第4面 水田跡一覧表(2)

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
1181	6.07	3.6	1216	6.15	3.3	1252	6.24	(2.1)
1182	6.10		1217	6.15	4.0	1253	6.21	(3.5)
1183	6.02		1218	6.18	3.6	1254	6.23	4.2
1184	6.01	7.4	1219	6.19	3.0	1255	6.22	6.0
1185	6.05	5.6	1220	6.14	3.1	1256	6.22	3.4
1186	6.07	4.8	1221	6.14	3.9	1257	6.22	2.1
1187	6.07	3.1	1222	6.15	4.7	1258	6.22	5.1
1188	6.10	3.8	1223	6.17	(6.7)	1259	6.24	2.8
1189	6.13	(3.4)	1224	6.14	(1.2)	1260	6.24	2.7
1190	6.11	(1.0)	1225	6.16	(2.2)	1261	6.24	3.9
1191	6.02	(1.3)	1226	6.12	3.3	1262	6.22	(1.2)
1192	6.04	9.0	1227	6.15	6.0	1263	6.23	(3.5)
1193	6.98	2.0	1228	6.16	4.1	1264	6.24	3.2
1194	6.09	3.5	1229	6.19	4.6	1265	6.24	4.6
1195	6.11	4.2	1230	6.21	2.3	1266	6.25	2.7
1196	6.13	3.9	1231	6.18	2.8	1267	6.23	5.8
1197	6.15	(1.2)	1232	6.15	3.2	1268	6.26	3.0
1198	6.05	(2.0)	1233	6.21	(6.3)	1269	6.27	1.9
1199	6.07	3.5	1234	6.18	8.4	1270	6.26	3.6
1200	6.11	2.8	1235	6.22	4.6	1271	6.23	
1201			1236	6.21	4.3	1272	6.23	
1202	6.11	2.4	1237	6.22	3.2	1273	6.24	4.2
1203	6.13	2.9	1238	6.20	3.3	1274	6.25	3.1
1204	6.13	2.5	1239	6.18	3.1	1275	6.25	3.4
1205	6.11	4.1	1240	6.19	4.0	1276	6.26	1.7
1206	6.14	5.5	1241	6.20	(3.2)	1277	6.24	4.1
1207	6.14	4.4	1242	6.21		1278	6.26	2.8
1208	6.15	6.8	1243	6.23	(2.0)	1279	6.27	(3.5)
1209	6.13		1245	6.22	8.1	1280	6.28	(1.0)
1210	6.14		1246	6.22	3.5	1281	6.26	5.5
1211	6.14	(0.5)	1247	6.22	2.2	1282	6.30	3.9
1212	6.09	2.5	1248	6.23	4.5	1283	6.26	5.1
1213	6.10	3.4	1249	6.21	3.0	1284	6.29	4.9
1214	6.12	3.4	1250	6.21	2.6	1285	6.26	8.0
1215	6.13	3.2	1251	6.22	3.8	1286	6.26	4.0

第19表 V区第4面 水田跡一覧表(3)

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
1287	6.28	(3.0)	1293	6.29	(7.9)	1299	6.31	(4.2)
1288	6.28	(1.9)	1294	6.26	(4.5)	1300	6.32	(1.5)
1289	6.28	5.5	1295	6.26	(2.6)	1301	6.30	
1290	6.30	3.2	1296	6.30	(2.6)	1302	6.31	(2.8)
1291	6.30	2.9	1297	6.29	7.0	1303	6.31	(1.0)
1292	6.28	2.7	1298	6.31	3.4			

第4章 自然科学的分析の結果

第1節 美乃利遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析

藁科 哲男、東村 武信

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている^{(1),(2),(3)}。サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の手続きも簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は、兵庫県加古川市に位置する美乃利遺跡から出土した弥生時代前期の30個、弥生時代前期末から中期初頭の6個、弥生時代中期の1個、弥生時代中期後半の32個、弥生時代後期の9個および弥生時代前期、弥生時代中期後半の可能性が考えられるもの各1個で、これら合計80個について産地分析の結果が得られたので報告する。

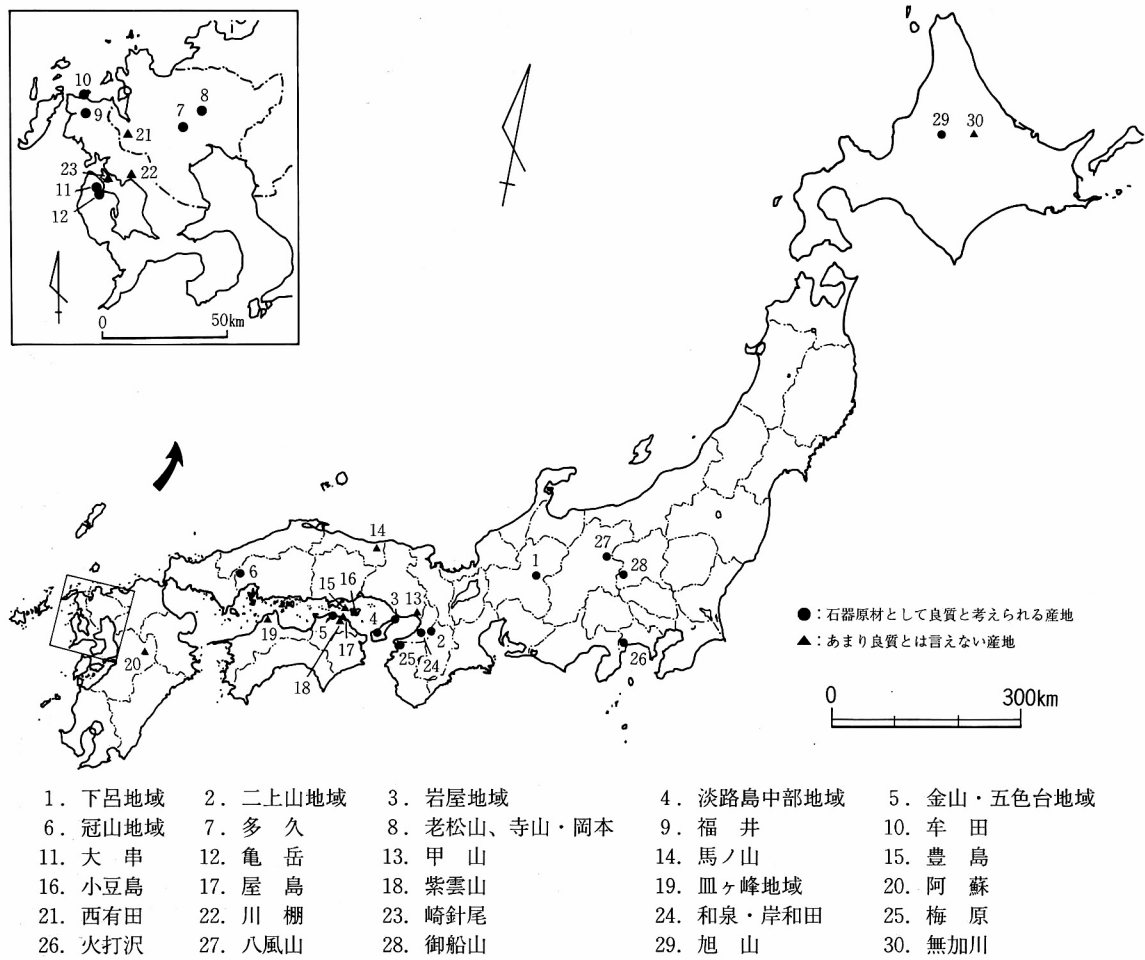
サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合

第1節 美乃利遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析



第162図 サヌカイトの原産地

わせて31個所の調査を終えている。第162図にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数個の群に分かれる。これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると40個の原石群に分類できる。その結果を第20表に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が第23表に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。第24表に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。第25表に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、第23・24表のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成